ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第106号

遺跡抄報　茶臼ヶ岳古墳群の発掘調査 ---------- 黒坪一樹 ---- 1
木津地区所在遺跡の発掘調査 ---------- 竹原一彦 ---- 5
平成19年度京都府の埋蔵文化財調査 ---------- 石井清司 ----11
平成19年度発掘調査略報 ----------21
13. 戸田遺跡
14. 蔵垣内遺跡第11次
15. 平成19年度　京都第二外環状道路関連遺跡
16. 木津川河床遺跡
トピックス
長岡京跡（伊賀寺遺跡）の多角形住居跡 ----------26
遺跡でたどる京都の歴史２　弥生時代の京都 ----------27
遺跡でたどる京都の歴史３　古墳時代の京都 ----------36
長岡京調査だより・102 ----------45
普及啓発事業 ----------47
組織一覧 ----------48
センターの動向 ----------49

2008年8月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

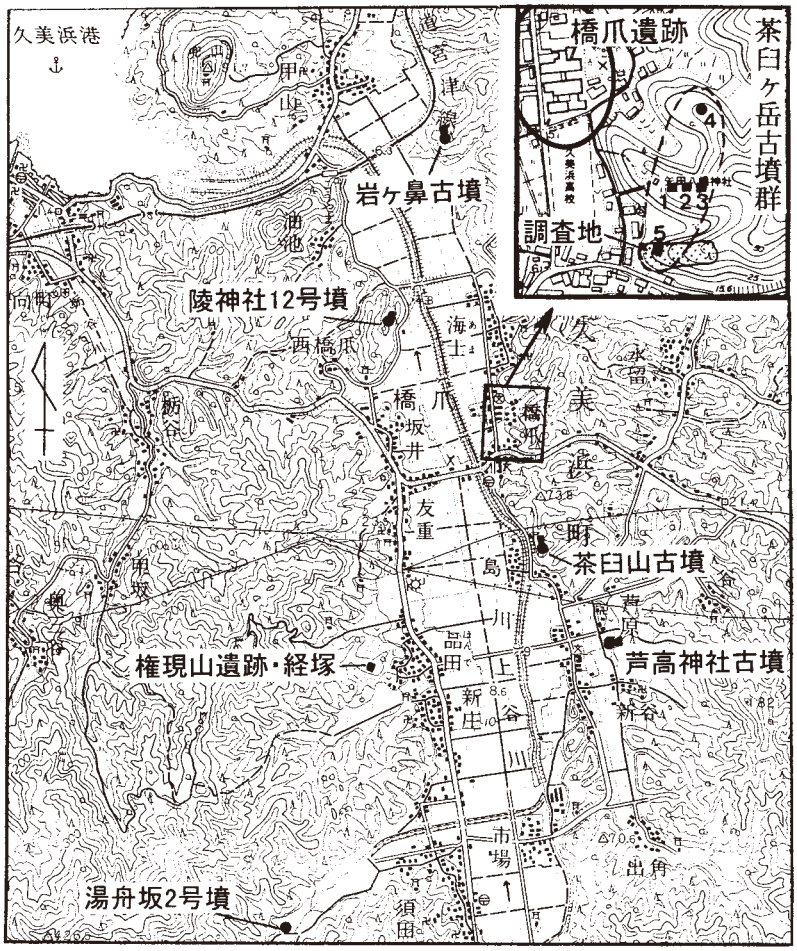
茶臼ヶ岳古墳群の発掘調査

黒坪一樹

１．はじめに

茶臼ヶ岳古墳群は、京丹後市久美浜町橋爪に所在し、川上谷川中流域の平野部を見下ろす丘陵尾根上に立地している（第１図）。この川上谷川流域には、陵神社 12 号墳、茶臼山古墳、岩ヶ鼻古墳、芦高神社古墳などの前方後円墳をはじめ、丘陵上には茶臼ヶ岳古墳群と同じように尾根上に造られた古墳が数多く分布している。また当地から３km ほど上流の須田には、金銅製の環頭太刀を出土したことで著名な湯舟坂２号墳（７世紀初頭）がある。

当地域では、時期的に５世紀に入って古墳の築造は増えるが、茶臼ヶ岳古墳群は古墳時代前期（４世紀前半）で、当地域の前方後円墳導入期以前のものとわかった。今回の調査地は５号墳の立地する尾根筋で、５号墳を含め、古墳時代前期の方墳３基、弥生時代後期の方形台状墓２基、平安時代の経塚１基を確認した（第１・２図）。



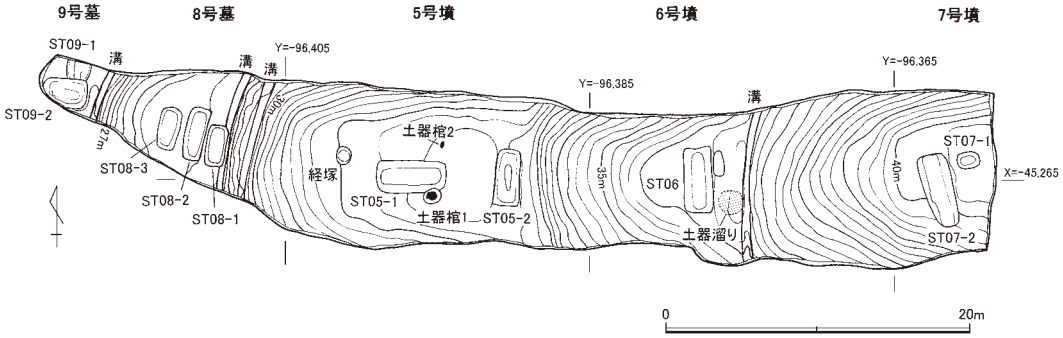
第１図　調査地位置図
（国土地理院 1/50,000「城崎」・京都府遺跡地図 1/10,000 久美浜（13）より作成）

２．各遺構の概要

５号墳

墳頂部の平坦面は東西 15m、南北８ｍを測る。ここから木棺墓とみられる２基の埋葬施設と土器棺墓２基を検出した。

中央の埋葬施設ＳＴ 05 －１は、東西に主軸をもつもので、遺体や棺を納めるために掘られた墓壙の規模は長辺 4.2m、短辺 2.8m を測る。棺の形態は舟底状木棺と推定され、棺内に副葬品等の遺物はみられなかった。東側の埋葬施設ＳＴ 05 －２は、南北に主軸をもち、長辺 3.6m、短辺 2.3m の規模で



第２図　遺構配置図（国土座標は世界測地系）

ある。墓壙の上面から、底部付近に円形の小さな穴を開けた複合口縁の壺などが出土した。墓壙の底で舟底状木棺の痕跡（写真１）を確認したが、棺内から遺物の出土はみられなかった。

土器棺墓１は、埋葬施設ＳＴ 05 － 1 の南東隅を一部壊して設けられていた。土器は器高約 60cm、幅約 45cm を測る土師器の大型複合口縁壺（写真２）である。口の部分は高杯を蓋に用いて閉塞され、丸底の底部には欠損がみられる。壺の中から人骨や遺物は出土しなかった。土器棺墓２は、中央部の埋葬施設ＳＴ 05 － 1 の北西側でみつかった。横になった複合口縁壺の口縁部に甕の上半部が重ねられていた。遺物の出土はみられなかった。土器棺墓１と同２の土器は、古墳時代前期の布留式といわれる形式のもので、４世紀前半頃の時期である。

古墳の埋葬施設以外に、経塚が墳丘平坦部の西端でみつかった。礫が散乱する中、須恵器壺と土師製筒型容器が並んで納められていた（写真３）。ともに内容物は遺存していなかった。なお、須恵器壺が置かれていた凝灰岩製の台座は丁寧な加工が施されている。

６号墳

墳頂部の平坦面は、南北８m、東西７m を測る。７号墳との境に幅 0.7 m、深さ 0.3 m、長さ 10m の区画溝が掘られていた。さらに溝西側の墳丘平坦面において、直径 1.6m の範囲に土師器が数個体分、破損した状態でみつかった。埋葬に伴う儀礼の痕跡であろう。

中心の埋葬施設ＳＴ 06 は、南北に主軸をもち、長辺４m、短辺 2.3m を測る。組み合わせ式の木棺とみられ、副葬品として、鉇の茎部とみられる鉄製品が１点ある。

写真１　埋葬施設ＳＴ 05-2（南から）

７号墳

最高所に位置し、墳頂部の平坦面は東西８m 以上、南北８m を測る。大小あわせて２基の埋葬施設

がみつかった。小さな埋葬施設ＳＴ07－1は1ｍ×1.5mの隅丸方形で、深さは0.5ｍを測る。下半は２段に掘られていたが出土遺物はない。

埋葬施設ＳＴ07－２は､南北に主軸をもち、長辺4.7m、短辺1.4～２ｍを測る。組合式の木棺が納められていたものと考えられるが、棺痕跡は確認できなかった。墓壙内から袋状鉄斧が1点出土した。古墳時代前期のものとみられる。

写真２　土器棺墓１（南から）

８号墓

弥生時代後期の墓である。墳頂部の平坦面は、南北７ｍ以上、東西７ｍある。ここに３基の埋葬施設が南北を主軸に並んでみつかった。埋葬施設ＳＴ08－1の墓壙規模は長辺2.7ｍ、短辺1.3mを測る。棺上に甕1点が置かれ、棺内に鉄剣1点・鉄鏃２点、さらに緑色凝灰岩製の管玉21点が入れられていた。埋葬施設ＳＴ08－２は、長辺3.5ｍ、短辺1.2ｍを測る。舟底状木棺が納められ、中からガラス製の管玉1点と小玉７点が出土した。埋葬施設ＳＴ08－３は、長辺2.8.m、短辺1.4ｍの規模で、舟底状木棺を納めている。棺内に副葬品は残存していなかった。墓壙内の埋め土に混入した弥生土器片を確認したのみである。

９号墓

墳頂部の平坦面は、南北４ｍ以上、東西４ｍ以上である。新旧の切り合いをもつ２基の埋葬施設がみつかった。ＳＴ09－1は南北に主軸をもつ埋葬施設である。墓壙の上面で弥生土器の高杯片が出土した。墓壙の規模は、短辺1.55ｍ、長辺1.3ｍ以上である。組み合わせ式の木棺を納める。棺内に副葬品の出土はなかった。

東西に主軸をもつ埋葬施設ＳＴ09－２は長辺2.6ｍ、短辺1.8ｍを測る。組み合わせ式の木棺を納めていたが、副葬品は残存していなかった。

切り合い関係から、ＳＴ09－1がＳＴ09－２に先行する。

写真３　経塚（北東から）

３．まとめ

今回、古墳時代前期の方墳３基（５

～７号墳）、弥生時代後期の方形台状墓２基（８・９号墓）、平安時代の経塚１基がみつかった。

写真４　調査地と橋爪遺跡（東から）

方墳はおよそ４世紀前半で、墳丘の裾部が明瞭でないこと、１墳丘上に複数の埋葬施設を構築すること、舟底状木棺を採用すること、埋葬施設にともなって破砕された土器を供えることなど、弥生時代墓制の伝統を色濃く残しているのが大きな特徴である。５世紀代の前方後円墳に先立つ古墳の調査例は、当地域では少なく貴重である。

弥生時代後期の方形台状墓については、副葬品がまとまって出土したＳＴ08－１は注目される。鉄製品、管玉とも精緻な作りである。特に鉄鏃は三坂神社墳墓群の３・４号墓出土のものに類似する。また、弥生時代後期に入って、棺や墓壙の上に甕や高杯などの土器を破砕して供献する行為は、丹後地方における当期の墓制の特徴をよく示している。

墓と集落の関係では、北西にひろがる橋爪遺跡（写真４）から当古墳・弥生墳墓と同時期（弥生時代後期～古墳時代前期）の土器が出土しており、橋爪遺跡が茶臼ヶ岳古墳群の集落であった可能性は高い。さらに久美浜町品田の丘陵上にある権現山遺跡・経塚は、弥生墳墓、古墳、経塚の良好な資料が知られている。茶臼ヶ岳古墳群と遺構内容や時期幅も類似し、丘陵地に展開する遺跡のあり方を窺い知ることができよう。

平安時代末の経塚は１基であるが、周辺の豊谷経塚（丸山）と権現山経塚（品田）は夥しい数の経塚を擁している。構造および時期的な差であろうか。いずれにしても、当地は経塚の検出例の多い地域である。

（くろつぼ・かずき＝当センター調査第２課第２係専門調査員）

木津地区所在遺跡の発掘調査

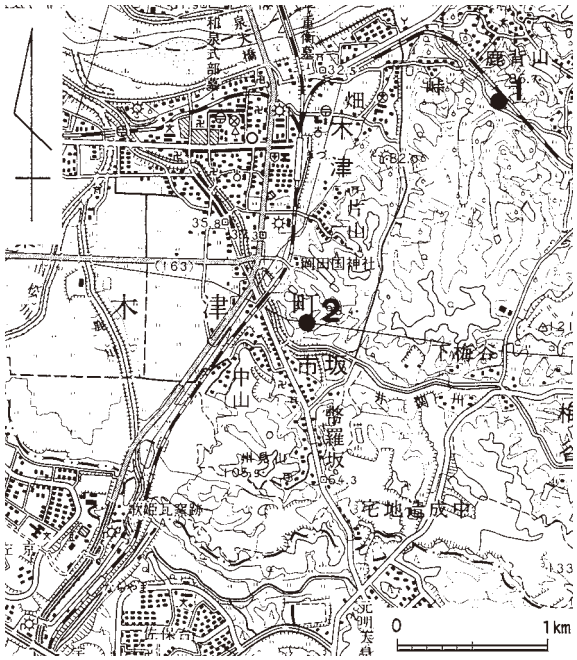
竹原一彦

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて、昭和 59 年度以来（当時は住宅･都市整備公団）継続して実施している。平成 19 年度は、木津平野の東側丘陵部に所在する鹿背山（かせやま）瓦窯跡と、文廻池（ぶんまわりいけ）遺跡（馬場南（ばばみなみ）遺跡）の２遺跡の発掘調査を実施した。鹿背山瓦窯跡は奈良時代の瓦窯跡であり、前年度の試掘調査で、奈良時代の２基の瓦窯と灰原や柱穴・溝等の遺構が検出されている。今年度は第２次調査として、窯跡に隣接する丘陵平坦地で面的調査を行った。文廻池遺跡は、以前に丘陵裾で土器の採集がみられたことから、遺跡が存在するとみられていた。今回、遺跡の性格や遺構・遺物の状況把握を目的に試掘調査を行った。ここでは、平成 19 年度の鹿背山瓦窯跡の発掘調査と、文廻池遺跡の試掘調査の概要と成果について紹介する。

（1）鹿背山瓦窯跡

鹿背山瓦窯跡は京都府木津川市鹿背山須原に所在し、平成 19 年 4 月 24 日～平成 20 年 2 月 22 日の期間で調査を実施した。調査面積は 4,800㎡である。

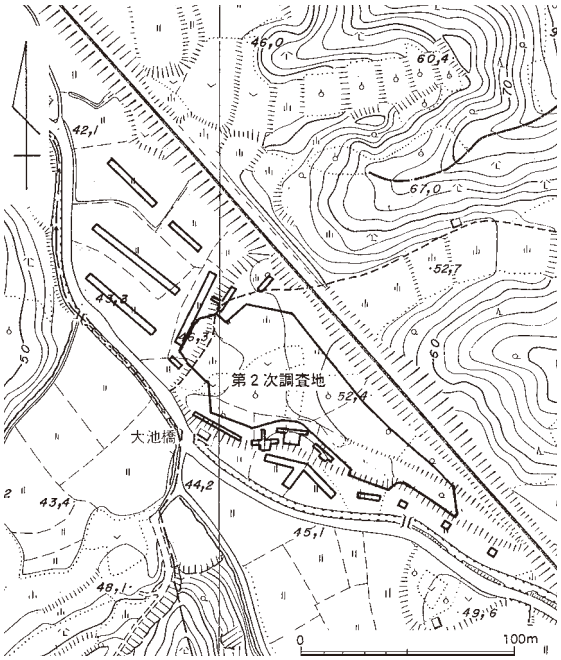
1. 調査の概要　第２次調査は、丘陵南側斜面で検出していた１号窯と２号窯の北側に広がる丘陵上で実施した。調査の結果、瓦窯関連の遺構として、２号窯の東側約 20 m付近から掘立柱



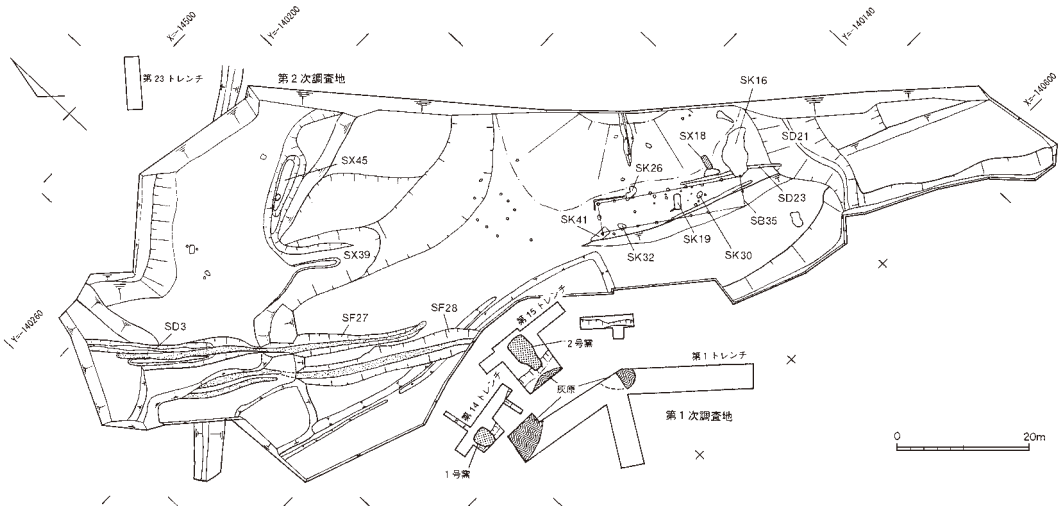
第１図　調査遺跡位置図

（国土地理院　1/50,000「奈良」）

1. 鹿背山瓦窯跡　　2. 文廻池遺跡



第２図　鹿背山瓦窯跡調査地位置図



第３図　鹿背山瓦窯跡平面図

建物跡（ＳＢ 35）１棟を検出したほか、建物跡周辺部には土坑（ＳＫ 16・19・26・32・41）や流路跡（ＳＤ 21）も存在した。調査地西部では、丘陵西裾の平地と丘陵部の瓦窯や工房を結ぶ通路遺構（ＳＦ 27･28）や、粘土採掘跡（ＳＸ 39）と粘土採掘坑（ＳＸ 45）を検出した。瓦窯関連以外では、平安時代前期の古墓（ＳＸ 18）１基を検出したほか、遺物では縄文時代に属する石器（尖頭器・石匙など）の出土をみている。以下、主要な検出遺構について述べていく。

第４図　ＳＦ 27（左）・ＳＦ 28（右）（北西から）

掘立柱建物跡ＳＢ 35　東西棟の建物跡で、桁行８間（21.6m）×梁間２間（4.5m）の規模を測る。建物の柱穴掘形は円形で、直径 0.3 ～ 0.5 mの規模を測る。柱の心々間距離は桁行が９尺（約 2.7 m）、梁間が７尺（約 2.1 m）の等間隔を測る。ＳＢ 35 の北東側と南西側では、建物桁行と梁間の柱穴列の外側に幅約 0.3 mの浅い溝（ＳＤ 23）を検出した。傾斜地上部側に位置することから、ＳＤ 23 は建物内への丘陵上部側からの雨水を防ぐ排水溝とみられる。ＳＢ 35 は、規模や形状から瓦の整形や乾燥の場として使用された建物跡の可能性が高いと判断される。

土坑ＳＫ 16・19・26・32・41　いずれもＳＢ 35 の周辺部で検出した遺物廃棄土坑とみられる遺構である。多くの土坑は地面を浅く掘り下げるが、一部には掘形が確認できない遺構もあり、遺物の集中地点も含んでいる。特にＳＫ 16 は規模も大きく、約３m四方の浅い土坑内から須恵器や瓦の破片が多量に出した。これらの土坑はＳＢ 35 の柱穴を完全に覆う例もあり、ＳＢ 35 の廃絶後に土器や瓦が廃棄されたとみられる。

溝ＳＤ 21　ＳＢ 35 の東側で検出した幅５m×深さ約１mの溝である。溝北側の底面では集水

桝（ＳＸ 44）を１基検出した。ＳＸ 44 は、直径約 0.5m ×深さ約 0.2 mの規模を測り、丸瓦と平瓦で周囲を囲っている。ＳＤ 21 は、溝の東側に遺構・遺物がほぼ存在しないことから、遺跡の東を区画する溝と考えられる。溝内には瓦以外に、多量の須恵器が含まれていた。特に須恵器は、重ね焼きで数個体が窯着したもの、焼け歪んだもの、焼成の悪いものなどが多数存在している。

第５図　ＳＸ 45 植物性編物出土状況（北西から）

通路状遺構ＳＦ 27・28　丘陵西側の斜面を大規模に削って造られた２本の並行する通路跡と考えられるで、丘陵西裾の平地と建物跡や窯跡の存在する丘陵上を結んでいる。北側のＳＦ 27 は丘陵上の東部、南側のＳＦ 28 は西側丘陵裾部分を後世の削平で壊されているが、ＳＦ 27 は全長約 48 m、ＳＦ 28 は全長約 34 mの範囲を検出した。やや蛇行しながらも併走するＳＦ 27 とＳＦ 28 は、心々間でほぼ４mの間隔を測る。遺存状況のよいＳＦ 28 では横断面がＵ字形を呈し、最大幅約４m×深さ約 1.1 mの規模を測る。ＳＦ 27・28 は共に通路の底面に小石が敷詰められ、石敷きの中央部が幅約 0.3 ～ 0.4 mの範囲で特に硬く踏み固められた状況にある。この石敷きの硬化部分は上面が平坦でもあり、轍の跡と考えられる。２つの遺構を比べると、北側のＳＦ 27 は路面の傾斜角度が強く、もう一方のＳＦ 28 は傾斜が緩い。

第６図　ＳＸ 18 全景（南西から）

粘土採掘穴ＳＸ 39・45　丘陵西部には北東から南西方向きに延びる小規模な谷地形が存在し、谷の東側斜面部に粘土層の露頭面がみられた。ＳＸ 39 とＳＸ 45 は粘土の採掘跡と考えられ、ＳＸ 39 では粘土を節理に沿って階段状に採掘した状況が確認できた。谷の東斜面裾のＳＸ 45 は全長約 10.8 m、幅約 2.4 m、深さ約 1.2 mの土坑である。良質な粘土のみを採掘した跡とみられる。内部からモッコとみられる植物質の編物が出土した。

古墓ＳＸ 18　墓壙底に炭を敷詰めた、平安時代前期の木槨木棺墓である。墓壙掘形は全長 2.95 m×幅 1.4 m、木棺規模は全長 1.92 m×幅 0.5 mを測る。棺材を固定した鉄釘が２重に出土

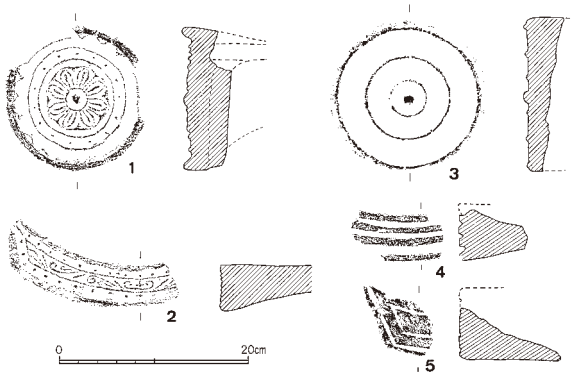
したことから、木棺の外側に一回り大きな木槨が存在したと推定される。棺内北小口側から灰釉壺２点・土師器甕、南小口側から土師器甕などの副葬品が出土した。

２．調査の成果　今回の調査では、瓦窯に伴う掘立柱建物跡・通路状遺構・粘土採掘跡などを検出したほか、奈良時代のモッコや多量の須恵器の出土など、貴重な調査成果を得ることができた。今回、粘土採掘・瓦製作・運搬等に関連する遺構の検出をみたことから、前年度に検出した２基の瓦窯跡とあわせて、鹿背山瓦窯跡のほぼ全様を明らかにすることが可能となった。特にＳＦ27とＳＦ28で検出した轍跡から、瓦など重量物の運搬に荷車を使用した可能性が高い。轍は１条であるところから、一輪車の使用が考えられる。また、窯跡から製品を搬出する際には、傾斜の緩やかなＳＦ28が主に使用されていたと推定される。

調査で出土した複弁蓮華文軒丸瓦（6313型式）と均整唐草文軒平瓦（6685型式）は、平城宮内に出土例が認められることから、鹿背山瓦窯の瓦は平城宮に供給されていたことが明らかとなった。

ＳＤ21から出土した須恵器には、割れや歪など不良な製品が数多く存在する。調査地内に窯跡は確認できないが、周辺部に奈良時代の須恵器の窯跡が存在する可能性が高い。

古墓ＳＸ18は平安時代前期の木槨木棺墓であり、墓の形態と副葬品の内容から、被葬者は身分の高い人物と考えられる。



第７図　鹿背山瓦窯出土瓦実測図

１．複弁蓮華文軒丸瓦　　２．均整唐草文軒平瓦

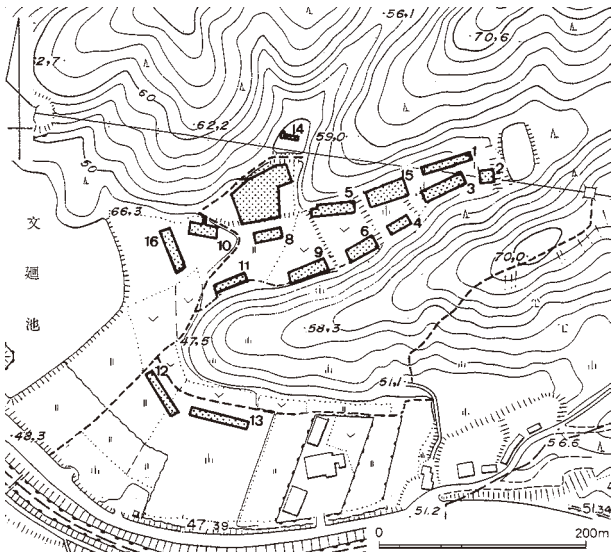
３．重圏文軒丸瓦　　４・５．重郭文軒平瓦

（２）文廻池（馬場南）遺跡

文廻池遺跡は京都府木津川市木津馬場南に所在し、平成19年10月９日～平成20年２月26日までの期間で試掘調査を実施した。調査面積は1,800㎡である。

１．調査の概要　文廻池遺跡は、ＪＲ木津駅の南約1Kmにあって、木津平野の東部丘陵を東西に貫く井関川の北岸丘陵裾に位置する。文廻池遺跡は、過去の分布調査で須恵器・土師器が採集されていた遺物散布地であった。今回、遺跡の性格・内容・範囲の確認を目的として、丘陵裾の水田部を中心に16か所の試掘トレンチを設けて調査を実施した。

試掘調査の結果、調査対象地となった北東から南西方向に開く小規模な谷地形の最



第８図　文廻池（馬場南）遺跡調査トレンチ配置図

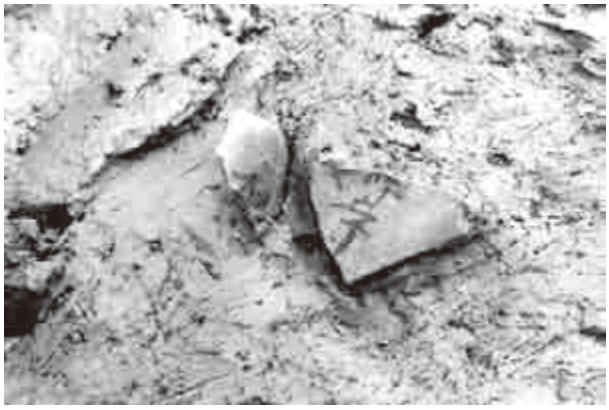
奥部第１～第４・第15トレンチと、南側尾根北裾の第６・第９トレンチは、灰色や淡緑灰色の砂や粘質土が厚く堆積し、無遺構・無遺物であり、遺跡の兆候は認められなかった。また、井関川に近い南側尾根南裾に設定した第12・第13トレンチでは、粒子の粗い白灰色系の砂や粘質砂と礫が堆積し、常に井関川の氾濫の影響下にあることが判明した。ここでは古墳時代から近世までの土器の出土をみたが、器表面はローリングによる摩滅がみられた。一方、谷の中央から西側開口部に設けた第５・第７～第11・第14・第16トレンチでは、掘立柱建物跡・井戸・溝などの遺構を検出すると共に、多くの遺物の出土をみた。以下、主要な遺構・遺物について述べる。

掘立柱建物跡ＳＢ01　尾根の南裾の第７トレンチの北端で検出した、東西３間（約8.3ｍ）×南北２間（約4.3ｍ）の掘立柱建物跡である。柱穴掘形は一辺約0.8ｍの方形で、柱穴10ヶ所のうち６か所の柱穴に柱根が存在した。柱根のうち１本は、柱底部の直径が0.3ｍ、残存長は0.7ｍを測る。建物跡周辺から三彩陶器や須恵器・土師器・瓦などの遺物の出土をみている。

井戸ＳＥ01　第５トレンチの西端部、尾根南裾の平坦地で検出した井戸跡である。円形ですり鉢状を呈する井戸掘形は、直径約４ｍの規模を測る。井戸内埋土の中層付近から三彩陶器の壺（頸部）や蓮華文軒丸瓦（6316型式）・平瓦などが出土した。井戸については、試掘調査のため、一部の調査であったが、井戸の下部で木製の井籠組井戸枠の一部を確認した。井戸の調査は今年度に行う予定である。

第９図　ＳＢ01（南西から）

第10図　第16トレンチＳＲ01（北東から）



第11図　第16トレンチＳＲ01墨書土器出土状況

第12図　第16トレンチＳＲ01木簡出土状況

溝ＳＲ 01　第７・第８・第 10・第 14・第 16 トレンチから検出した、多量の土器や木製遺物を包含する大規模な溝状遺構である。ＳＲ 01 は、建物跡ＳＢ 01 の立地する平地の東と南を区画する溝と考えられ、溝底を検出した第 16 トレンチでは幅約４ｍ×深さ約２ｍの規模を測る。第８トレンチでは、溝内からこれまでに 300 点を越える灯明皿が一括して出土したほか、木簡１点・建築部材などが出土している。第 10 トレンチでは、ＳＲ 01 右岸の一部を検出し、溝から須恵器や土師器に混じって三彩陶器・墨書土器などが出土した。第16トレンチでは、溝内から須恵器（杯・蓋・壺など）や土師器（甕・灯明皿）に混じって、三彩で施釉された土製品や 50 点にのぼる墨書土器、木簡１点、木製品の出土をみている。

溝ＳＤ 02　第 11 トレンチで検出した弥生時代中期の溝で、幅約 0.5 ｍ×深さ 0.2 ｍを測り、約４ｍ分を検出した。溝内から、甕・高杯・石包丁が出土した。

２．調査の成果

今回の調査では、谷の北西部丘陵裾を中心に、奈良時代の掘立柱建物跡１棟・井戸・溝を検出した。検出遺構と出土遺物の大部分は奈良時代に属するが、弥生時代中期の溝や遺物の出土も僅かにみられた。奈良時代の出土遺物では、木簡や墨書土器など貴重な文字資料が多数出土している。また、三彩施釉の土製品には壺・蓋・鉢・不明土製品など、豊富な種類が認められた。

（たけはら・かずひこ＝当センター調査第２課第１係主任調査員）

平成 19 年度京都府の埋蔵文化財調査

石井清司

京都府埋蔵文化財調査研究センターでの平成 19 年度の発掘調査は、21 件 19 遺跡であり、北は京丹後市久美浜町、南は相楽郡笠置町史跡名勝笠置山までの発掘調査を実施した。注目される遺跡としては丹後地域において現在確認されている唯一の白鳳時代寺院である俵野廃寺、仿製二神二獣鏡を出土した千束５号墳、江戸時代の城跡である宮津城の城壁と城内道路、方形周溝墓群を検出した時塚遺跡、奈良時代の瓦工房である鹿背山瓦窯跡、史跡名勝笠置山での堀や虎口の状況などがある。また各教育委員会でも古墳、寺、都城での調査において注目される遺構・遺物の出土があった。ここでは当埋文センターが実施した調査とともに、各市町教育委員会が実施した現地説明会資料を中心に京都府内での埋蔵文化財調査成果を概観する。

〈丹後地域〉

京丹後市久美浜町茶臼ヶ岳古墳群　茶臼ヶ岳古墳群は、これまで５基の古墳が確認されていたが、道路建設に伴い再度、分布調査を行い、さらに、発掘調査を実施したところ、新たに２基の古墳を確認した。また、弥生時代の台状墓、平安時代末の経塚を検出した。５・６・７号墳は墳頂平坦面が方形で、５号墳の墳頂平坦面が南北 6.5 m×東西 14.5 mを測るもののほか、７m 前後の小規模なものである。５号墳では２基の木棺直葬墓と２基の土器棺墓を、６号墳では１基の木棺直葬墓、７号墳では大小２基の木棺直葬墓を検出した。また５号墳の西側の丘陵下位では弥生時代後期の台状墓２基（８・９号墓）を検出し、３基の埋葬施設を確認した８号墓では鉄剣と緑色凝灰岩の管玉を検出した。５号墳の墳丘上では平安時代末期に筒形の土製容器を石で囲んだ経塚もつくられていた。

京丹後市網野町俵野廃寺　俵野廃寺は、大正 11 年に多量の瓦と礎石の心礎が河川の工事中に発見され、丹後地域における飛鳥・白鳳時代の唯一の寺院（廃寺）として知られている。平成 18 年度に河川の改修工事に伴う事前調査をして寺域を確認するための試掘調査を実施し、今年度はその試掘調査を受けて発掘調査をおこなったものである。今回の発掘調査では塔や金堂など建物の礎石、掘立柱建物跡などは検出できなかったが、多量の瓦を含む遺物の堆積状況が確認され、近接した位置に

写真１　京丹後市久美浜町茶臼ヶ岳古墳群（経塚）

堂塔が存在するものと思われ、一部石敷き遺構も確認された。

京丹後市峰山町千束古墳群　千束古墳群は、国史跡である赤坂今井墳墓の北150ｍと近接した位置にある古墳群で、２基の古墳（５・６号墳）の発掘調査をおこなった。５号墳は墳頂平坦面が半円形で、直径13ｍの円墳を意識した古墳と推定されている。墳頂部平坦面には木棺直葬の埋葬施設が１基あり、棺内からは青銅製鏡（仿製斜縁二神二獣鏡）１面のほか、ヒスイ・碧玉製勾玉４点、碧玉あるいは緑色凝灰岩製管玉43点、臼玉107点、ガラス小玉３点が出土し、５世紀前半の築造が考えられている。５号墳の東側丘陵下位にある６号墳は５号墳の墳丘の一部をカットして築かれた全長12ｍの円墳で、墳頂部に木棺直葬の埋葬施設が１基築かれていた。棺内からは６世紀前半の須恵器杯身・杯蓋・瑞、土師器があり、杯身・杯蓋を枕として転用したことがその出土状況から推定されている。６号墳は５号墳の築造後、３～４世代の時間の経過を経て築造されたことが明らかとなった。

京丹後市峰山町湧田山１号墳　京丹後市教育委員会によって古墳の範囲確認調査がおこなわれ、前方部の基底部とも思われる傾斜変換点を確認したほか、弥生時代前期末から中期後半までの土器を含む溝状遺構を検出した。（平成19年９月現地説明会）

京丹後市弥栄町谷奥古墳群　谷奥古墳群は、これまでの分布調査、遺跡地図によると５基の古墳が存在することが知られており、特に１号墳は直径30ｍ、高さ６ｍを測る大型円墳として知られている。平成18年度に１号墳を除いて２～５号墳を対象として試掘調査を行い、３・４・５号墳の埋葬施設の有無を確認する調査とともに、樹木伐採後の地形の状況から新たに未発見の古墳が存在する可能性が高いことが判明した丘陵部に試掘調査を実施した。その結果、新たに９基の古墳を確認し、平成19年度に確認した古墳を含めて発掘調査を実施した。その結果、１号墳を除き、14基の古墳の墳丘規模・埋葬施設の発掘調査を実施した。

各古墳は、丘陵を削り出して階段状に成形した古墳で、２・10号墳を除いて１～２基の埋葬施設を検出した。このうち、８号墳は墳丘平坦面に長辺10.5ｍ、短辺4.2ｍを測る墓壙内に長さ8.2ｍ、幅1.7ｍの割竹形木棺が据えられていた。墓壙及び棺内からの副葬品は鉄剣１振、鉄鏃４本、刀子１点で、棺規模に対して副葬品の出土点数は少なかった。

谷奥古墳群は長楕円形に成形し９基の埋葬施設が散在する２号墳から丘陵低位にむかって順次古墳が形成されており、限られた出土遺物から古墳時代前期から中期前半にかけての古墳群であることが確認された。

写真２　京丹後市弥栄町谷奥古墳群遠景

宮津市難波野遺跡　難波野遺跡は、国道178号新設道路（通称府中バイパス）改良工事に伴う調査で、平成15年度から継続しておこなわれており、19年度

写真３　宮津市宮津城跡 14-2 区石垣全景

が埋蔵文化財調査としては最終年度となる。今回の調査地点は昨年度の調査で検出していた古墳時代中期の土器を多量に並べた祭祀遺構と思われる土器群の東側である。今回の調査では古墳時代中期の遺構・遺物は確認されなかったが、鎌倉時代後期を中心とした石積み遺構 1 基、1 間× 1 間（東西 2.4 m、南北 2.0 m）の掘立柱建物跡 1 棟、10 ヶ所以上の井戸跡を検出した。また土層観察によると大規模な土石流によって中世以降の遺構･遺物が良好な状態で遺存していることが明らかとなった。出土遺物としては昨年度と同様、多量の漆絵漆器（赤漆・黒漆）のほか、多量の木器・国内外の陶器・磁器が出土しており、有力な官人・武家・寺社関係の施設が近接した位置にあったものと思われる。また､昨年度出土した遺物のなかに「寛治五年」（1091 年）の年号が書かれた木簡（題箋木簡）が含まれていることが明らかとなった。（現地説明会平成 19 年 8 月 4 日）

難波野遺跡に近接した**大垣遺跡・一の宮遺跡**では宮津市教育委員会による籠神社の鳥居の立て替えに伴う立ち会い調査で､直径 80㎝ の栗の大木を利用した柱が 2 本､据わった状態で出土した。この柱根は掘形と包含層の出土遺物の観察から平安時代末ないし鎌倉時代の鳥居の柱根と推定されており、雪舟の「天橋立図」に描かれる以前の鳥居の存在が明らかとなった。（現地説明会平成 19 年 8 月 4 日）

宮津市宮津城跡　宮津城は、天正 8 年（1580 年）細川藤孝が外湾の日本海につながる港湾に築いた平城で、慶長 5 年（1600 年）の関ヶ原の戦いの前に細川氏が宮津城を焼き払い現在の舞鶴市にある田辺城に籠城した。江戸時代には京極氏によって城下の整備を開始し、明治時代に廃城となる。今回の宮津城跡の調査は大手川の改修工事に伴うもので、平成 17 年度から継続して実施しているもので、平成 19 年度がこの事業としては最終年度となった。

調査地は現存する絵図によると城内の三の丸の西端と外堀である大手川にあたる地点で、平成 18 年度の調査で検出した三の丸の西南端にあたる出入り口部分の石垣の北延長部にあたる。今回の調査では京極高知が丹後に入った江戸時代初期につくられた通路の両側溝と武家屋敷に関連した西面する石垣、城壁が確認できた。

〈中丹地域〉

舞鶴市中山城跡　舞鶴市中山城跡・中山近世墓（第 4 次）の調査は、府道西神崎上東線の拡幅に伴うものである。昭和 57 年度（第 1 次調査）・昭和 58 年度（第 2 次調査）において近世墓を検出しており、近世墓が造営される以前には丹後守護職、一色義道が細川・明智勢に攻められ自刃したと伝える城跡である。城跡は標高 60m、城郭の幅約 20m、延長 500m を測り、東側

は深田、西側は竪堀と険峻な急坂が由良川に面している。

近世墓は平面方形の墓壙でその規模は 0.9 ～ 1.2 m、深さ 1.2 m前後、墓壙内から錫杖、銅椀（磬）、透彫菊形鋲、布、引手金具、壺金具、古銭（寛永通宝）12 枚などが出土した。中山城跡に関連した遺構としては、第１・第２・第３空堀、土塁、曲輪を検出した。第１空堀は、断面Ｖ字形で、調査区の西端で約 5.7m、東端で約 7.0m を測り、東西約 23m を検出した。第２空堀も尾根の頂部で約 3.5m、調査区の西側の最も広い部分で約 4.5m、東側の最も広い部分で約 5.0m を測り、東西約 22m。第３空堀も尾根の頂部で約 2.2m、調査区の西側の最も広い部分で約 3.0m、東側の最も広い部分で約 2.7m を測り、東西約 12.5m を検出した。曲輪は第２・第３土塁の東側から両側にかけて曲輪が築かれている。

写真４　舞鶴市中山城跡、ＢＩ地区

写真５　室橋遺跡第 11 次　竪穴式住居跡 SH11710

舞鶴市田畔遺跡　田畔遺跡は平成 18・19 年度の２ヶ年にわたって舞鶴市教育委員会が発掘調査を実施し、７世紀を中心とした竪穴式住居跡と掘立柱建物跡を検出した。また８世紀以降には円面硯・転用硯・墨書土器が出土しており、官衙あるいは有力者の居住地を思わせる遺物が出土している。（平成 19 年９月 15 日現地説明会）

福知山市戸田遺跡　由良川左岸地域では由良川の防災対策として築堤工事に伴う調査として観音寺遺跡などの調査を進めてきたが、今回戸田地域においても同様の築堤工事が予定され、その事前調査として工事計画地 20000㎡を対象に 1780㎡の試掘調査を実施した。この試掘調査では 15 ヶ所のトレンチを設定して調査をすすめたところ、対象地の東半部で中世の遺構を確認した。

〈南丹地域〉

南丹市八木町室橋遺跡　室橋遺跡は昨年度からの継続調査であり、平成 19 年度も府道亀岡園部線と府営ほ場整備に関連して調査を実施した。ほ場整備に関連した第 11 次調査では弥生時代後期から古墳時代初めにかけて幅３m、深さ 1.5 mの南北方向にのびる大溝（溝３）と奈良時代から平安時代にかけて掘られた幅約３m、深さ 1.5 mで溝３と同規模・同方向の大溝を検出している。この室橋地域では 1184 年、文覚上人による「新庄用水」が開掘されたことが知られており、

文覚上人の「新庄用水」の開掘以前にも同様の性格の溝が古くは弥生時代後期まで遡ることが明らかとなった。またこの第 11 次調査では 8 世紀後半の時期の掘立柱建物跡群、第 15 次調査では古墳時代中期の竪穴式住居跡群を検出している。

亀岡市時塚遺跡　時塚遺跡は国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴う継続調査で、新たに弥生時代中期の方形周溝墓を 22 基検出した。方形周溝墓のなかには、明瞭に木棺痕跡が残るものがある。同遺跡ではこれまで盾持ち人形埴輪が出土した時塚 1 号墳が知られているが、今回の調査でも方・円墳を新たに 11 基検出し、古墳時代中期後半に方墳がつくられ、後期後半には円墳へと墳形が変化することが明らかとなった。また、この遺跡ではこれまで奈良時代の掘立柱建物跡群を検出しているが、あらたに倉庫跡と思われる総柱の掘立柱建物跡 3 棟を含む 11 棟の掘立柱建物跡を検出し、弥生時代以降、亀岡盆地の川東地域における重要な遺跡であることが明らかとなった。(現地説明会平成 19 年 9 月 8 日)

亀岡市出雲遺跡　亀岡市教育委員会・京都府教育委員会が実施した国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴う出雲遺跡の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居跡 4 基を検出し、弥生時代後期の竪穴式住居跡の 1 基は床面の一部がコの字形の高まりを残すベッド状遺構をもつ六角形の平面であることが明らかとなった (平成 19 年 7 月 21 日現地説明会)。また亀岡市教育委員会の調査 (出雲遺跡第 13 次調査) では古墳時代前期の円墳 (出雲武式古墳) を新たに検出した。この出雲武式古墳は墳丘の大半と埋葬施設は削平されているが、墳丘斜面の葺石と周溝を検出し、墳丘直径 19 m、周溝を含めると直径 25.5 mを測る。周溝の一部に周溝を掘り残した陸橋部があり、陸橋部東側で石釧 1 点と木製品が出土した。(平成 20 年 1 月 12 日現地説明会)

写真 6　時塚遺跡第 17 次調査地全景

亀岡市蔵垣内遺跡　蔵垣内遺跡はこれまでの国営農地再編整備事業に伴う発掘調査で、古墳時代から飛鳥時代の竪穴式住居跡、横穴式石室、奈良時代の掘立柱建物跡などを確認しており、大規模な集落・古墳群の存在が明らかとなっている。今回の蔵垣内第11次調査は、府道亀岡園部バイパスに伴う調査である。４ヶ所（Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｇ調査区）で調査をおこない、Ｄ・Ｅ地区では縄文時代早期の土器を、Ａ地区で弥生土器を確認し、縄文早期・弥生時代の遺跡の存在が明らかとなった。Ａ地区では飛鳥時代を中心とした７基の竪穴式住居跡の存在が明らかとなった。竪穴式住居跡では一辺８ｍを測る大型の竪穴式住居跡も１基確認している。

〈乙訓地域・長岡京跡〉

向日市元稲荷古墳　これまでの３次にわたる調査において、後方部中央に埋葬施設を有し、前方部でも特殊器台形埴輪・壺形埴輪の密集する区画があり、古墳時代前期の全長94ｍを測る前方後方墳であることが確認されている。今回の第４次調査はくびれ部東側（４-１トレンチ）、後方部の東側に２ヶ所（４-２・３トレンチ）を設定して調査を進めたところ、各トレンチで葺石を確認し、後方部が方形ではなく台形を呈すること、古墳の東側のくびれ部から後方部の広い範囲に礫敷が構築されていることが明らかとなった。（平成20年２月16日現地説明会）

長岡京市史跡恵解山古墳　第８次となる史跡恵解山古墳の調査では、東側くびれ部に設けた調査区（約65㎡）で、第３傾斜面の葺石の基底石（40㎝前後の大きさ）と基底部から傾斜角26°で積み上げられた葺石を検出した。この葺石はくびれ部で葺石の積み上げの基準となる大きめの礫が１列に並んでいた。前方部西側の８-３調査区（約63㎡）では第２テラスに樹立していた埴輪列を検出した。この埴輪列は幅0.5ｍ、深さ約16㎝の溝を掘り、その中に約35㎝の埴輪芯心間隔で９本の埴輪が樹立していた。８-３調査区の堆積土には平安時代を含む土器類とともに古墳時代の鉄製農工具が含まれており、昭和55年に検出した武器類を主とした埋納施設とは別に鉄製農工具を埋納した施設の存在の可能性も高くなった。（平成20年２月17日現地説明会）

長岡京市長法寺遺跡　長法寺遺跡では、６世紀半ばごろの直径16ｍ以上に復元できる円墳で、横穴式石室をもつ古墳を検出した。ただ、この古墳は石室の大半が抜き取られており奥壁の一石と石棺の破片を検出したのみである。

長岡宮立会07004次　長岡宮07004次調査では朝堂院東第１堂の北西部で地覆石の抜き取り溝とその北側で礫敷遺構を検出した。

長岡京跡右京899次・下海印寺遺跡　右京899次調査では明確な長岡京期の遺構は検出されなかったが、古墳時代後期の竪穴式住居跡４基のほか、縄文時代後期の配石遺構などを検出した。

長岡京跡右京910次・友岡遺跡　調査地は長岡京の条坊復元によると右京八条三坊九町にあたり、発掘調査をすすめたところ長岡京期の可能性がある主軸を正方位にとる掘立柱建物跡１棟を検出し、周辺の包含層からは土馬も出土している。また掘立柱建物跡では一辺１ｍ以上を測る掘形を有し、北に対して西に振れる掘立柱建物跡２棟を検出した。この調査では長岡京造営以前の遺構・遺物として縄文時代の土坑（あるいは竪穴式住居跡の一角）、縄文時代晩期の石冠、有

舌尖頭器などが出土している。

長岡京跡右京 901 次・右京 927 次・右京 928 次・伊賀寺遺跡　この調査は京都第二外環道路建設に伴う調査で、平成 15 年度から試掘及び発掘調査が続く継続調査である。今回の右京 901 次調査は長岡京の復元によると右京七条四坊十二町にあたる地点で、小泉川の河川堆積部分にあたる。この調査では長岡京期の顕著な遺構の検出がなく、長岡京造営以前の弥生時代時代後期の流路の跡を検出した。この流路内からは木器とともに良好な状態で土器が出土した。右京 927 次調査では縄文時代後期の住居跡などを検出した。また隣接した右京 928 次調査では床面にベッド状の高まりをもつ多角形住居を 1 基検出した。

長岡京跡右京 903 次・上里遺跡　長岡京の条坊復元では右京二条三坊一・八・十一町で、十一町域では東西３間（4.8 ｍ）×南北３間（5.1 ｍ）の総柱建物 1 棟、その南で東西２間（4.8 ｍ）×南北２間（6.3 ｍ）の南北棟の掘立柱建物跡を検出した。また西三坊坊間東小路とその東西両側溝を検出した。この調査では長岡京造営以前の遺構（上里遺跡）として縄文時代晩期の竪穴式住居跡７基、土器棺墓３基、土壙墓３基をこれまで検出しているが、新たに縄文・弥生土器、石器を含む大溝のほか、石囲い炉を含む炉跡を検出している。

〈北山城地域・平安京跡〉

京都市左京区植物園北遺跡　植物園北遺跡ではこれまで多くの弥生時代・古墳時代の竪穴式住居跡などが検出されているが、今回の調査では縄文時代前期の石匕が出土した。

京都市右京区西京極遺跡　平成 19 年度の調査では弥生時代後期の竪穴式住居跡を 20 基近く検出したほか、奈良時代の覆い屋をもつ井籠組の井戸を検出した。井戸内から「南」と墨書された土器や硯が出土した。

平安京朝堂院昌福堂　朝堂院の十二堂の中の第一堂である昌福堂の調査では、基壇の最下部の延石と思われる凝灰岩 4 石分を検出した。（平成 19 年 6 月 25 日広報資料）

平安宮豊楽院　朝堂院の西隣にあり東西約 170 m、南北約 400 mの区画をもつ豊楽院中の豊楽殿跡（天皇の御座所）の北側で清暑堂と思われる建物跡の基壇盛り土と基壇に表面を飾る凝灰岩の抜き取り穴を確認した。また当初、豊楽殿では北廊の存在が確認できなかったが、今回の調査によって清暑堂から続く幅約 13 m、厚さ 0.6 mの基壇盛り土があり、北廊と思われる遺構を検出した。（第 109 回埋蔵文化財セミナー資料　平成 20 年 2 月 24 日）

平安京右京六条二坊・西堀川小路　京都市下京区西七条では西堀川通りに面した調査である。これまでの西堀川小路の調査では中央に堀川が流れているため本来の小路幅四丈（約 12 ｍ）に対して八丈（約 24 ｍ）となっており、今回の調査でも同様の成果を得ているとともに堀川の西側の路面の幅６ｍと築地塀、西堀川の東肩が良好な状態でみつかった。この運河は時期をおって川幅を広げていることも明らかとなった。また六町内では築地内溝、掘立柱建物跡、井戸などを検出した。（平成 19 年 6 月 23 日・同年 11 月 10 日現地説明会）

平安京左京三条二坊十町　京都市中京区旧城巽中学校跡地で、堀川院の跡地である。堀川院は

南北２町域を占める太政大臣藤原基経の邸宅で、平安時代中期（円融天皇）には臨時の御所である「里内裏」として使われ、安元３年（1177 年）の焼失以降、衰退したと言われている。今回の調査は堀川院の南半部にあたり、白河・堀川天皇が里内裏として利用した時期の南北 26 m、東西 15 mの汀を含む苑地跡を検出した。この苑地では要所に景石や白砂を敷きつめて化粧されていることが判明した。

内裏と聚楽第を結ぶ正親町小路沿いの調査で、金箔瓦を多量に含む井戸跡を検出した。また旧本能寺跡の調査で、最大幅６m、深さ１mで長さ２m分の石垣を残す堀跡から能の異体字を記した軒丸瓦を含む多量の焼失瓦が出土した。この堀跡は旧本能寺の内堀と考えられている。

史跡本願寺境内　京都市下京区浄土真宗本願寺派の本山西本願寺境内での調査では、桃山時代末期と江戸時代前期の２時期の池跡を検出した。この池跡では焼けた瓦を含む埋土のよって古い時期の池を埋め立て、新しい池をつくっていることが明らかとなった。この焼けた瓦を含む埋土は元和３年（1617 年）に浴室から失火し阿弥陀堂・御影堂などが焼失した埋土と考えられている。（平成 19 年 5 月 10 日現地説明会）

〈恭仁宮跡・南山城地域〉

恭仁宮跡　恭仁宮跡では、大極殿院地区と朝堂院地区で調査が行われた。大極殿院の北東部では大極殿院回廊の側柱の礎石の抜き取り穴を 11 ヶ所確認し、その回廊の西側（外側）で回廊に伴う雨落ち溝を検出した。また大極殿院の北西隅部を同様に検出し、大極殿院の東西幅が約 142 m（480 尺）で、大極殿の北側には幅約 28 m（107 尺）の空閑地が広がっていることが明らかとなった。

伏見城跡　伏見城跡の調査では、東西７m、南北 12 m以上の長方形の平面が復元できる建物に伴う石垣を検出した。出土遺物には佐竹氏の家紋である「五本骨扇に月丸」をもつ軒丸瓦が出土しており、佐竹屋敷地の一角と考えられている。またこの屋敷地に近接して柵列や内法の幅 0.7 m、深さ 0.3 mの石組の側溝も検出された。（2007 年 11 月 10 日現地説明会）

宇治市旦椋遺跡　旦椋遺跡で６世紀末から７世紀初めに築かれた円墳２基がそのまま砂に埋まった状態であり、周辺には７世紀後半から８世紀初頭の竪穴式住居跡も検出している。

宇治市広野廃寺　広野廃寺では寺域の南端と思われる地点で直径約 30㎝の柱列（２間分）を検出し、この検出状況から掘立柱塀の柱穴の可能性が高く、広野廃寺の寺域の範囲が 110 m四方である可能性が高くなった。

宇治市宇治川太閤堤遺跡　宇治川右岸で幅 5.5 m、高さ 2.2 m、長さ 75 m分の南北に伸びる堤を検出した。この堤は傾斜角 30°の斜面の法面下端に等間隔に松杭をうち、斜面及び上平坦面に粘板岩の板石を貼りつけたもので、宇治川の川筋の付け替え工事を豊臣秀吉が諸大名に命じた「太閤堤」の一画ではないかと推定されているものである。この堤では宇治川にむかって幅９m、長さ 8.5 mの突出部があり、宇治川の川の流れをやわらげる石出（いしだし）の施設が存在し、河川の防災対策からも注目される遺跡である。

宇治市街遺跡　宇治市街遺跡では藤原氏との関わり深い貴族の別荘か倉庫跡と思われる平安時代後期の大型建物跡を検出した。

八幡市宮ノ背西遺跡　宮ノ背西遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭の方形竪穴式住居跡３基を検出し、そのうち、１基は一辺５～６ｍの方形で床面には幅約 0.6 ｍ、高さ 0.2 ｍのコの字形の段を設けたベッド状遺構が存在することが明らかとなった。（平成 19 年７月 10 日現地説明会）

写真７　八幡市木津川河床遺跡、湿地全景

八幡市木津川河床遺跡　木津川・宇治川・桂川の三川が合流する地点になる木津川河床遺跡では、多数の牛馬と思われる獣骨と平安時代前・中期の土器を含む包含層を検出した。

城陽市芝ヶ原９号墳　墳丘の範囲確認と埋葬施設の遺存状況を確認するための調査が行われた。墳丘の西側１段目の平坦面では埴輪列を検出。また埋葬施設は後世の攪乱がなく、築造された当時の状況がそのまま遺存していることが明らかとなった。

城陽市山道東古墳　土地区画整備事業に伴い横道遺跡での調査において造り出し付き円墳（山道東古墳）を新たに検出した。山道東古墳は古墳時代中期の古墳で、墳丘直径 27.5 ｍで二段築成、墳丘のまわりには外堤、外濠がめぐり、外濠までを含めた全長は南北約 55 ｍ、東西約 50 ｍを測る。墳丘斜面には葺石をもち、墳丘一段目平坦面と造り出しの一段目平坦面、外堤に円筒埴輪を中心に一部形象埴輪が立て並べられていることが明らかとなった。（平成 19 年７月 25 日現地説明会）

城陽市平川廃寺　城陽市教育委員会により、金堂の位置と規模を確定するための発掘調査が行われ、金堂基壇が東西 22 ｍ、南北 19.5m で地覆石のうえに瓦積みされた瓦積み基壇であることが明らかとなった。出土遺物中、注目されるものとして、遡像がある。

木津川市国史跡高麗寺跡（第８次）　昨年度にその一部を検出していた南門跡の全容解明と南辺築地跡の東方部の確認を目的として調査が進められた。この調査により南門は桁行 20 尺（5.94 ｍ）×梁間 12 尺（3.56 ｍ）で屋根には鴟尾を飾った切妻造りの屋根をもつ八脚門であること、南門の北側には幅６尺（1.78 ｍ）の石を敷き並べた通路を検出した。この門・通路は金堂・中門・南門が寺域の西に偏って一直線に並ぶ配置であることが明らかとなった。また南門の西側では 30 ｍにわたって南辺築地跡を検出するとともに築地塀に使用された瓦が内側に崩落した状態で出土した。

木津川市鹿背山瓦窯跡　鹿背山瓦窯は平成 18 年度の試掘調査で、丘陵南側斜面から１号窯と２号窯の２基の瓦窯跡と、廃棄された多量の瓦を含む灰原が見つかっている。平成 19 年度の調査は、丘陵上部で建物跡などの瓦生産に関係した工房跡があるかどうかを確認するために発掘調査を実施した。その結果、瓦窯跡の東側丘陵部から工房建物跡とみられる２間（4.5m）×８間

写真８　相楽郡笠置町史跡及び名勝笠置山３～７トレンチ全景

(21.8m) の掘立柱建物跡 1 棟と瓦溜り 5 基を検出した。また、調査地西部では丘陵西裾と工房跡・瓦窯跡を結ぶ道路状遺構 2 条を検出した。また、瓦窯跡以外の遺構では、工房建物跡近くに灰釉瓶子などの副葬品を含む平安時代前期の木炭木槨墓ＳＸ 18 を検出した。

木津川市馬場南遺跡　京都府の遺跡地図では文廻池遺跡として周知されている遺跡で、これまでに須恵器の散布が知られていた遺跡である。今回の調査は鹿背山瓦窯と同様、関西学術研究都市木津中央地区特定区画整理事業に伴って試掘調査を実施した。16 ヶ所のトレンチを設定して調査をすすめた。その結果、谷部の西半部で掘立柱建物跡 1 棟（２間×３間）とその東側で流路跡を検出した。この流路内からは 300 点以上の土師器灯明皿、二彩・三彩の壺・蓋・盤とともに「寺」・「神」・「神□(雄カ)寺」・「大」などの墨書土器が出土した。

相楽郡笠置町史跡及び名勝笠置山　鎌倉時代末期の醍醐天皇が笠置山に立てこもり戦った 1331 年の元弘の乱で知られる笠置山は、1192 年に興福寺僧貞慶が笠置寺に隠遁したことでも知られている。今回の調査は笠置城跡の南側で、中世の建物跡があったと考えられる谷部と笠置山城の出入り口である虎口と考える地点の調査を実施した。その結果、谷部では鎌倉時代末期の幅広い堀跡、南北朝期の溝と建物および焼土層、戦国時代の虎口の一部を確認した。

府内博物館施設では埋蔵文化財に関係した企画・特別展として京都府丹後郷土資料館では『王墓の考古学－丹後の弥生王権成立の謎を解く－』、京丹後市古代の里資料館では『京丹後市の鏡』が実施された。

（いしい・せいじ＝当センター調査第２課課長補佐兼第３係長）

平成 19 年度発掘調査略報

13. 戸田（とだ）遺跡

所 在 地　京都府福知山市戸田地先

調査期間　平成 19 年 11 月 28 日～平成 20 年 2 月 22 日

調査面積　1,780㎡

はじめに　今回の発掘調査は、由良川堤防改良工事に伴い国土交通省福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。戸田遺跡は、由良川左岸の微高地に広がる遺物散布地として周知されていたが、本格的な発掘調査はこれまで実施されたことがなく遺跡の内容については不明であった。

調査の概要　今回の調査は、遺構の分布状況を把握するために実施した試掘調査である。築堤範囲の西側で９か所、東側の由良川堤防寄りで７か所にトレンチを設定して実施した。その結果、築堤範囲の西側に設定した１～９トレンチでは、顕著な遺構や遺物はみられなかった。しかし、東側に設定した 10 ～ 16 トレンチでは、10 トレンチ西半部と 12 ～ 14 トレンチにおいて中世の遺構と遺物を確認した。そのため、さらに分布範囲を確定する目的で、12 ～ 14 トレンチ間にトレンチを追加して設定した。

発掘調査では、現地表下約 1.2 ～ 1.3 ｍで中世～近世初頭の遺物包含層及び遺構面を確認するとともに、その下層において中世の土坑、ピット、溝などを検出した。なお、溝は、素掘りの溝と拳大から人頭大の礫を溝内に充填する溝があり、暗渠排水溝として機能していた可能性がある。

出土遺物には、椀や皿などの土師器や瓦器、瓦質土器、中国製青磁椀、鉄製品、土錘、砥石、硯の未成品などがある。なお、中世の遺構面下の状況を把握するため、下層に堆積するマンガン沈着層を断ち割り、現地表下約２ｍまで掘り下げた結果、河川堆積による砂礫層から弥生時代後期の土器片が数点出土したが、遺構は検出できなかった。

まとめ　今回の試掘調査では、10 トレンチ西半部と 12 ～ 14 トレンチにおいて中世～近世初頭の遺構、遺物を確認した。ピットには、根石を配した柱穴があり、調査範囲を拡張することによって掘立柱建物跡として復元できる可能性が高い。また、溝には、建物を区画する一群と住環境を整えるための暗渠排水溝の一群に分類することができる。今後の面的調査により、由良川中流域に所在する中世のムラの一端が明らかになることが期待される。

（柴　暁彦）　調査地位置図（国土地理院 1/50,000「福知山」）

14. 蔵垣内（くらがいち）遺跡第 11 次

所 在 地　京都府亀岡市千歳町国分

調査期間　平成 19 年 10 月 15 日～平成 20 年３月７日

調査面積　2,480 ㎡

はじめに　今回の発掘調査は、亀岡園部線地方道路交付金（業務委託）事業にとして、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。蔵垣内遺跡では、平成 16 年度から同 18 年度にかけて、国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を多数確認している。今回の調査でも関連する遺構・遺物の検出が予想された。

調査の概要　今年度は、４か所の調査区を設定して、調査を実施した。

Ａ地区の調査　竪穴式住居跡７基をはじめ、多数の柱穴・土坑を検出した。これらのうちの１基は、一辺８ｍ前後を測る大型の住居跡である。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。また、３基の住居跡でカマドを検出した。出土遺物は少ないが、飛鳥時代を中心とする住居跡群である。このほか、弥生時代中期や奈良時代、平安時代の土器が出土している。

Ｄ地区の調査　弥生時代の溝や飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、柱穴、土坑などを検出した。弥生時代の溝からは中期の土器が出土し、方形周溝墓の周溝の可能性もある。住居跡は一辺３ｍほどの小型の住居跡である。飛鳥時代と考えられる。柱穴も多数検出したが、建物跡として復原できたのは１棟のみである。柱穴から出土した土器はおおむね奈良時代のものである。このほか、縄文時代早期の押型文土器が遺物包含層から出土した。

Ｅ地区の調査　柱穴や土坑などを検出した。縄文時代早期の押型文土器や奈良時代の土器などが出土した。

Ｇ地区の調査　多数の柱穴、土坑などを検出し、掘立柱建物跡２棟に復原することができた。平安時代から中世にかけての土器が出土した。

まとめ　過去の周辺での調査と同様に、飛鳥時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されるとともに、新たに縄文時代早期の押型文土器や弥生時代中期の遺構・遺物が検出された。

（筒井崇史）

調査地位置図（国土地理院　1/50,000　京都西北部）

15. 平成 19 年度　京都第二外環状道路関連遺跡

所 在 地　京都府長岡京市下海印寺上内田ほか

調査期間　平成 19 年 4 月 24 日～平成 20 年 2 月 28 日

調査面積　4,750㎡

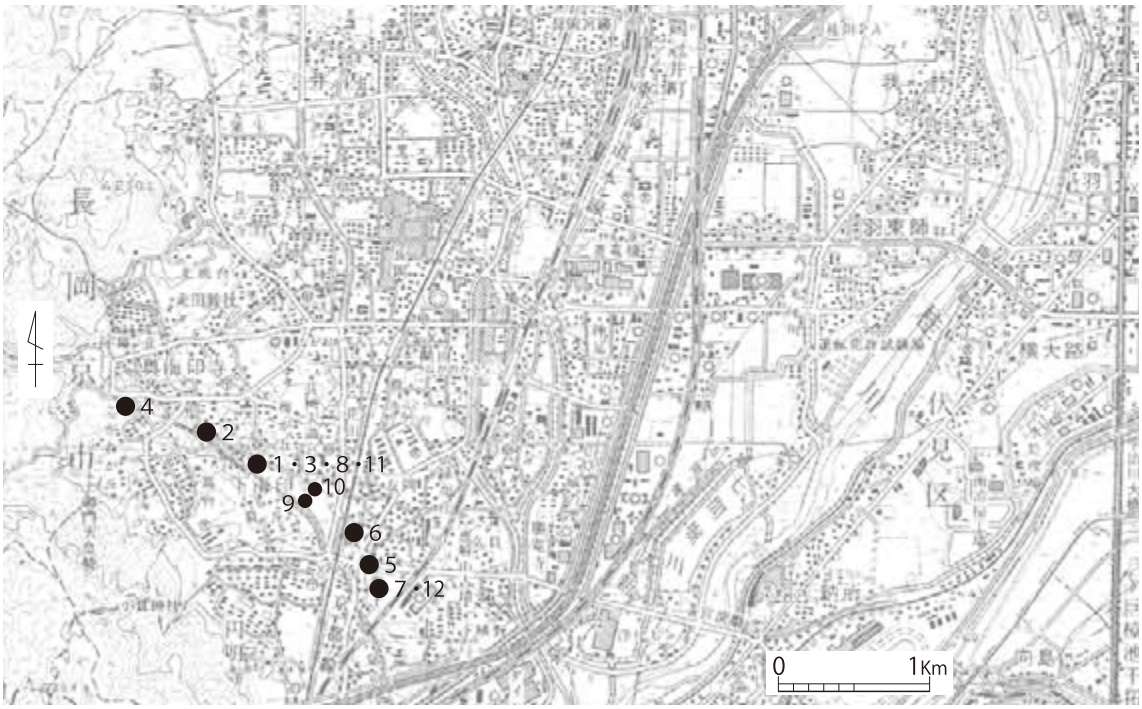
はじめに

京都第二外環状道路は京都西南部の交通渋滞緩和のため名神高速道路大山崎ジャンクションから京都縦貫道路沓掛インターチェンジまでの高速道路である。この道路の予定地は長岡京跡、下海印寺遺跡、伊賀寺遺跡をはじめとする多くの遺跡を横切ることから、平成 15 年から路線内の試掘調査を先行して開始し、用地買収の進捗にあわせ発掘調査を実施してきた。平成 19 年度は表 1 に示したように 9 地点の試掘調査と 3 地点の本発掘調査を実施した。

調査概要

試掘調査地点 9 地点の内、遺構の検出できた地点は長岡京跡右京第 902 次調査（上内田地区）、長岡京跡右京第 926 次調査（上内田地区）、長岡京跡右京第 926 次調査（調子地区）、長岡京跡右京第 928 次調査（調子地区）の 4 地点で遺構が検出できた。他の地点では河川の水成堆積物や斜面堆積物を確認するにとどまり、顕著な人為的遺構は検出できなかった。

長岡京跡右京第 902 次調査（上内田地区）では、弥生時代末の竪穴式住居跡を検出した。長岡京跡右京第 926 次調査（上内田地区）では、土坑や弥生時代の流路などを検出した。長岡京跡右



調査地位置図（国土地理院　1/50,000　京都西南部）

表 1　平成 19 年度調査地一覧

番号	右京	試掘・本掘	大字	地区名	調査期間	調査面積	概要
1	901次	本掘	下海印寺	上内田	4/24 ～ 11/26	1,400㎡	弥生時代流路跡
2	902次	試掘	下海印寺	尾流	4/24 ～ 10/19	100㎡	長岡京期の流路
3			下海印寺	上内田		200㎡	弥生時代竪穴式住居
4			奥海印寺	荒堀		350㎡	遺物・遺構なし
5			調子	調子		150㎡	顕著な遺構なし
6	926次	試掘	友岡	友岡	11/19 ～ 2/28	200㎡	顕著な遺構なし
7			調子	調子		150㎡	中世溝・柱穴
8			下海印寺	上内田		400㎡	土坑等
9	927次	試掘	下海印寺	岸ノ下	11/28 ～ 3/4	400㎡	顕著な遺構なし
10		本掘	下海印寺	下内田		800㎡	縄文～平安遺構多数
11	928次	本掘	下海印寺	上内田	11/27 ～ 1/17	400㎡	弥生時代竪穴式住居
12		試掘	調子	調子	2/4 ～ 2/29	200㎡	平安末遺構

京第 926 次調査（調子地区）では中世の溝、柱穴などを検出した。長岡京跡右京第 928 次調査（調子地区）では、平安時代末の火葬墓の可能性のある土坑を検出している。

試掘調査の成果をうけて実施した本発掘調査は 3 件である。

長岡京跡右京第 901 次調査では 1,400㎡の発掘調査を実施した。平成 18 年度に実施した隣接する調査区では、古墳時代の竪穴式住居跡が複数検出できた。今回の調査区でも竪穴式住居跡の検出が期待されたが、住居跡は検出できなかった。調査区は多数の流路跡が北西方向から南東方向に流れていた。その中には弥生時代末の完形のものを含む土器群を検出できたものもあり、大型の表皮が残された木材や人為的に組んだと考えられる木組みや加工材とともに出土している。

長岡京跡右京第 926 次調査（上内田地区）は長岡京跡右京第 901 次調査の西に接したトレンチで、長岡京跡右京第 902 次調査（上内田地区）試掘の結果を受けて両調査に挟まれた地域で実施した発掘調査である。この発掘調査によって長岡京跡右京第 902 次調査（上内田地区）の竪穴式住居跡がベット状遺構を伴う多角形住居であることが明らかになった。また、完形の土器が出土した土坑なども検出されている。

長岡京跡右京第 907 次調査（下内田地区）では、縄文時代中期末の竪穴式住居跡、土坑、古墳時代後期の竪穴式住居跡、長岡京期の溝、掘立柱建物跡などの遺構を検出した。出土遺物は縄文土器・石器・土師器・須恵器・瓦などが多数出土した。

（中川和哉）

16. 木津川河床遺跡（きづがわかしょう）

所 在 地　八幡市科手～橋本

調査期間　平成 19 年 10 月 30 日～平成 20 年 3 月 4 日

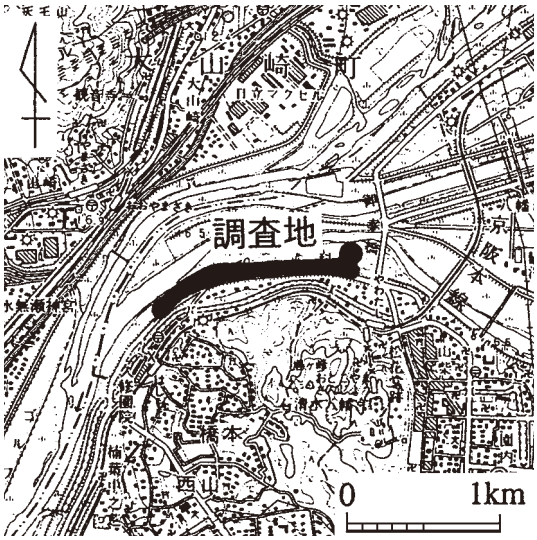
調査面積　3,300㎡

はじめに　木津川河床遺跡は、八幡市の北端にあり、木津川・宇治川・桂川の３川が合流し、淀川となって大阪湾へ流れる、その合流地点に位置している。調査地点は、現在河川敷ではあるが、明治２年の大規模な河川付け替え工事以前は、田畠が広がっていたようである。また、河床では多くの土器・陶磁器が採集されており、発掘調査でも遺跡の東部で弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が確認されている。なお、平安時代前期に、調査地南方約 1 km に、石清水八幡宮が造営され、天皇をはじめ、多くの人々の信仰の対象となり、中世には繁栄していた。

今回の発掘調査　今回の発掘調査は、河川敷の高水敷部分を本調査し、南岸の堤防に沿って京都府・大阪府境までを試掘調査した。

本調査では、洪水によって形成された湿地（青色粘土層）から、多数の獣骨と平安時代前～中期の土器が出土した。獣骨は馬が 40 頭以上、牛が数頭であった。土器の種類は、緑釉陶器椀や黒色土器椀、土師器杯・皿、土師器甕などである。この湿地は徐々に北側へ後退し、陸化したようであるが、特に、平安時代中後期の洪水によって 1 m近く砂が堆積し、一気に陸化したとみられる。その地表面で掘立柱建物と考えられる柱穴が発見された。柱穴は調査地の西部のみ認められた。その後、田畑が形成されたようで、耕作に伴う溝が確認された。この頃、大地震があり、下から噴き上げた砂（液状化現象の一部）が各所で認められた。おそらく、慶長の伏見大地震（1596 年）に伴うものと考えている。試掘調査地は、６箇所のトレンチを設定し、現地表面から３～４ mほど掘り下げたが、近世以降の砂ばかりで、遺構面はさらに下部と思われる。

まとめ　本調査地で平安時代前期の土器・陶磁器が出土した。遺物の状態から、再堆積したものではなく、近隣から人為的に持ってこられたものといえる。これらの土器・陶磁器と同じ土層で獣骨が出土した。湿地周辺で牛や馬などが飼育されていたことが想像される。土層の観察によれば、大小さまざまな洪水に見舞われたことがわかった。それにもかかわらず、平安時代後期には小規模な建物を建て、耕地を形成するという、営みを知ることができた。（伊野近富）



調査地位置図

（国土地理院　1/50,000　京都西南部）

トピックス

長岡京跡（伊賀寺遺跡）の多角形住居跡

平成 19 年度における伊賀寺遺跡の発掘調査で、多角形住居跡が検出された。ここに紹介する多角形の平面プランをもつ竪穴式住居跡は、京都第二外環状道路の建設に伴う調査でその一部が確認されたものである。弥生時代後期末～古墳時代初頭の住居跡と推定される。住居の東側を中心に約 300㎡の本調査を実施したが、竪穴式住居跡の検出はこの 1 棟にとどまっている。周辺では、京都第二外環状道路の建設に伴うこれまでの調査で、ほぼ同時期の流路のほか、古墳時代後期の竪穴式住居跡群を検出している。また調査地北西約 200 mに位置する下海印寺遺跡（尾流地区）では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器集積遺構や流路跡が確認されている。調査地点は、南に接して現在の小泉川が流れており、段丘の縁辺部に位置するとみられる。現在は住宅地となっている調査地北部の微高地上に集落域が広がる可能性が高い。

検出した多角形住居跡は、床面の一部は調査範囲外で未調査であるが、復原すると平面形はほぼ六角形をなすとみられる。住居の規模は、南北長約 8.1 mを測り、一辺約 3.0 ～ 3.8 m、深さは約 0.25 mを測る。主柱穴は、対角線上に 4 基が配置され、床面中央南寄りで炭化物を多く含む中央土坑を、また南西の一角で貯蔵穴とみられる土坑を確認した。住居の床面では、北東と北西の 2 辺の周壁に並行して、住居内高床部（いわゆるベッド状遺構）を検出した。高床部上で高杯 1 点が出土したが、全体に出土遺物は乏しく、床面上でわずかな土器が出土したにすぎない。出土土器から、住居の時期は弥生時後期末～古墳時代初頭とみられる。

多角形住居は、府内ではすでに 13 例の調査例があり、五角形住居、六角形住居、八角形住居などがある。西日本の竪穴式住居跡の平面形は、弥生時代前期・中期は主に円形で、後期に円形から方形に徐々に移行するという大きな流れがある。多角形住居は、前期～中期にもわずかながら認められるが、多くが後期に帰属する。円形から方形の住居形態に移行するうえで橋渡しとなる住居形態とされるが、特に後期後葉に住居の床面積が増床するにしたがって急激に増える傾向があり、床面積の拡大にも関係するとみられる。全国的には 150 例以上の類例があり、分布は特に東部瀬戸内地域の加古川流域に集中している。播磨・摂津地域の多角形住居には住居内高床部を伴うという特徴があり、伊賀寺遺跡で発見された多角形住居もこうした地域との交流を背景にしたものと考えられる。

多角形住居跡全景

（高野陽子）

遺跡でたどる京都の歴史２

弥生時代の京都

はじめに　弥生時代は大陸からの様々な影響を受けて、大きく生活様式が変化した時代です。西日本では弥生時代の始まりとともに米つくりが本格化したことが予想されます。京都では京丹後市函石浜（はこいしはま）遺跡が最も古い報告例で、京都市深草（ふかくさ）遺跡や長岡京市雲宮（くものみや）遺跡など弥生土器研究の基本資料が出土した遺跡もあります。弥生時代は土器の変化や文化内容から前期・中期・後期に別けられますが、始まりと終わりの年代については現在様々な意見があり、決着をみていません。

京都府の主な弥生遺跡

弥生時代の集落　京都府内で最も古い弥生時代人たちの生活の跡は、京都市下鳥羽（しもとば）遺跡、長岡京市雲宮遺跡で発見されています。前期の遺跡には京丹後市扇谷（おうぎだに）遺跡・同途中ヶ丘（とちゅうがおか）遺跡、亀岡市太田（おおた）遺跡、長岡京市雲宮遺跡などが挙げられます。また、これらの集落の中には平地に作られたものと、高地性集落と呼ばれる丘陵上に作られたものが存在しています。

台地の上のムラ、奥谷西遺跡

中期になると自然堤防や河岸段丘上に大規模な遺跡が作られるようになります。福知山市観音寺（かんのんじ）遺跡、舞鶴市志高（しだか）遺跡、南丹市池上（いけがみ）遺跡、長岡京市神足（こうたり）遺跡、久御山町市田斉当坊（いちださいとうぼう）遺跡などでは広域に遺構が分布しており、集落規模が大きかったことがうかがえます。丹後地域では中期においても台地上に作られた大型集落が認められます。与謝野町日吉ヶ丘（ひよしがおか）遺跡や京丹後市奈具（なぐ）・奈具岡（なぐおか）遺跡群が挙げられます。特に急な斜面の山側を削りこんで、その土を谷側に盛土することによって住居を作る集落は特徴的で、このような形態の集落は古墳時代まで継続します。

内里八丁遺跡の水田跡

食物の生産　弥生時代に入ると本格的に水田耕作が行われるようになります。京都市京都大学

構内遺跡では、前期の水田跡が見つかっています。与謝野町蔵ケ崎遺跡からは弥生時代中期の矢板を打ち込んだ灌漑用水と考えられる溝が検出されています。八幡市内里八丁遺跡や京都市東土川遺跡では小規模に区画された水田が多く検出されました。農耕に必要な農耕具は集落内で生産されているようで、雲宮・東土川遺跡では木製農耕具とともに未製品も発見されています。

弥生時代には稲作に注目が集まりますが、雲宮遺跡では鹿・イノシシ（ブタ？）の骨が出土しており、縄文時代の主要な獲物である 2 種類の動物が継続して捕獲され食べられていたことがわかります。また、京丹後市の奈具谷遺跡では弥生時代のトチの実の加工をした施設が発見されており、弥生時代においても狩猟や採集は一定の割合で継続されていました。

道具の生産　弥生時代の土器は器面に施される文様に変化はあるものの、縄文土器に比べると造形的に簡素な形態のものが多くなります。全国的に弥生時代前期の土器には大きく違いを見いだせませんが、中期以降京都の北部と南部では土器の形態や文様に差異が生じており、文化圏の違いとして認識できます。

弥生時代には金属器が大陸からもたらされました。向日市鶏冠井遺跡では銅鐸の鋳型が出土し、青銅器を生産した形跡が認められます。隣接する長岡京市神足遺跡（R 807）では銅剣が出土しています。また、府内には銅鐸が発見された遺跡が 7 か所あります。鉄器を生産した遺跡としては京丹後市奈具岡遺跡が上げられます。この遺跡では玉作りに付随した鉄器生産が行われました。分析により鉄素材が朝鮮半島経由で中国からもたらされたと考えられています。日吉ヶ丘遺跡で

南丹市池上遺跡の弥生土器

は、鍛造鉄斧や鋳造鉄斧、鉇など多くの鉄器が出土しており、全国的に見ても京都北部の鉄器の量は多く、強い勢力を持っていたものと考えられます。

石器は弥生時代においても主要な道具であり、大きく分けると打製石器と磨製石器に分けられます。打製石器の多くはサヌカイトと呼ばれる火山岩から作られており石鏃・錐・石小刀・石剣などが作られ、石材は香川県の金山や奈良県の二上山からもたらされました。磨製石器には石剣・石庖丁・石斧・石鏃などがあります。丹波地域を中心に多くの原石の露頭があり、京都では磨製石器の割合が他地域に比べ多い傾向が見られます。

奈具谷遺跡のトチの実加工施設

時塚遺跡の磨製石器

弥生時代のお墓　弥生時代になると一定の空間を持った墓が出現します。墓の多くは方形周溝墓と呼ばれる四角く溝をめぐらした内側に墓穴を掘り遺体を埋葬したものです。方形周溝墓は池上遺跡、東土川遺跡、大山崎町下植野南（しもうえのみなみ）遺跡、市田斉当坊遺跡のように溝を共有して連続的に作られるものが一般的です。

下上野南遺跡の方形周溝墓群

京都府北部では、弥生時代前期から中期初頭には集落から離れた丘陵上に方形台状墓と呼ばれる墓が築かれます。しかし、中期になると京都府南部と同様、集落の近くに墓を築くようになります。この中には方形周溝墓よりはるかに大きな方形貼石墓と呼ばれる墳丘を石で装飾した墓が見られます。後期からは再び集落から離れた丘陵上に台状墓を築き始め、鉄製品や玉類などの副葬品が納められています。やがて、京都府北部では大型の墳丘墓が出現します。こうしたことから、丹後を中心に畿内中央部とは異なる独自の勢力が存在したものと考えられています。

なお、京都府南部では後期の墓はほとんど見つかっておらず、その様相についてはよく分かっていません。

（中川和哉）

戦いの犠牲者

弥生時代は、稲作が行われ、のどかな風景を思い浮かべる方が多いと思いますが、食物生産力の増加は、ムラとムラの戦いの激化を促したと考えられます。人が人を殺した証拠は縄文時代にもありますが、狩猟用の道具を用いたものです。弥生時代になると大陸からの有用な文化とともに、人殺しに特化した武器も入ってきました。

九州などでは首が切り落とされた遺体や、剣や鏃が刺さった遺体が見つかっており戦いなどで殺された人と考えられています。

近畿地方では多くの場合、骨などは腐って検出されませんが、稀に遺体が葬られていたと考えられる場所から石製の武器が出土します。こうした場合、武器は死者に奉られた副葬品と考えることもできますが、出土遺物を詳細に観察すると、遺体の骨に当たって破損したものが多く含まれています。こうしたことから、見つかった武器によって絶命した可能性が高いと考えられます。

京都では京都市東土川（ひがしつちかわ）遺跡、大山崎町下植野（しもうえの）南（みなみ）遺跡、南丹市池上（いけがみ）遺跡、京丹後市豊谷（とよたに）墳墓群で、石製武器が出土したお墓が発見されています。

東土川遺跡の方形周溝墓

東土川遺跡の石製武器出土墓壙

東土川遺跡墓壙出土の石鏃

特に東土川遺跡では、方形周溝墓の溝の中を掘りくぼめ安置した木棺の中から、磨製の石剣や打製の石鏃が数多く出土しました。いずれも体内に射込まれた形跡が見られることから、集団によって多数の矢を受け、剣で刺され壮絶な死を迎えた人であることがわかります。棺の大きさは成人用にしては小さいことから、首を取られていた可能性もあります。

武器の特徴は、遠く離れた地域のものではなく、同じ地域のものであることから、近隣のムラムラとの争いであったことがわかります。

（ 中川和哉 ）

海を臨む貼石墓

天橋立と難波野遺跡

難波野遺跡の方形貼石墓

上空から見た難波野遺跡方形貼石墓

難波野遺跡は、日本三景のひとつ天橋立の北側、成相山系と阿蘇海・宮津湾に挟まれた狭小な緩斜面上に位置し、海岸がすぐそばにせまっています。平成 17 年度の調査で方形貼石墓２基が検出されました。貼石墓とは墳丘斜面に石を貼り付けている弥生時代の墳墓です。

貼石墓のひとつは、南辺の貼石基底部が約 16.2 mあります。東辺の貼石基底部で約 7.8 m、西辺で約 2.8 mを検出しました。貼石の周囲には周溝が巡らされており、周溝の規模は東辺で約 4.5 m、南辺で約５mあります。墳丘の高さは約 0.6 m、東辺では周溝底部からは約１mあります。墳丘斜面の貼石は、竪穴式住居跡により壊された部分を除き、基底部からほぼ３段目付近まで残っていました。貼石は長辺を貼石墓の辺に直交して設置しています。貼石に使用されている石は、いずれもやや摩滅した花崗岩で、調査地周辺から採取されたものと考えられます。貼石の傾斜角度は 30 度前後です。墳丘の遺存状況が良好な反面、墳丘上の平坦部に設けられたと考えられる埋葬施設は、調査範囲内では検出できませんでした。もうひとつの貼石墓は「Ｌ」字状に、屈曲して並ぶ石列を確認し、方形貼石墓の北西隅部と判断されました。北辺の一部約６mと西辺の一部約 1.5 mを検出したことになります。周囲には周溝が巡らされていたと考えられ、墳丘の高さは貼石基底部から 30 ～ 40㎝ を測ります。墳丘斜面の貼石は２ないし３段目まで遺存しています。墳丘斜面の貼石は、扁平で摩滅が進んだものを使用しており、海浜部から採取したものと考えられます。難波野遺跡の貼石墓は、これまでの調査された事例からみて、築造当初に近い姿であり、これだけ良好に遺存している事例は極めて少ないとみられます。方形貼石墓の築造時期については、埋葬施設が検出されず、土器などの遺物がほとんど無く、詳細な検討はできていませんが、周溝内から出土した土器の細片や丹後地域での他の類例からみて、弥生時代中期後半（約2100年前）の所産と想定しています。　（石尾政信）

玉作りのムラ

奈具岡遺跡全景

玉作りの各種道具類

水晶製玉の原石と未製品

身体装飾という言葉があります。これは、服飾・アクセサリー・化粧などの総称です。私たち現代人は、身だしなみとしてこれらの装飾を日常のこととしていますが、古代においてはこうした装飾の一つ一つに特別な意味がありました。特に、貝や石、ガラス、金属など、当時貴重だった材料で作られた首飾り・頭飾りなどの玉類は、社会的地位、役割などを示すシンボルとして重要なものでした。

縄文時代には、翡翠製の大珠や琥珀製の玉、滑石製の耳飾りなどが作られましたが、こうした装身具は、ムラの中でもごく限られた人々が身につけたものでした。弥生時代には、朝鮮半島の影響を受けて、石製とガラス製の玉類が流行します。石製玉類の素材として、緑色凝灰岩製の管玉・勾玉がたくさん作られるようになります。地域を代表するような大きなムラで玉作りをするようになり、出土例も増えます。それでも、誰でもが玉で身体を飾ることができるというわけにはいきませんでした。

今から二千年以上前の弥生時代中期（中期中～後半期）に、こうした玉類を専門に作っていたムラが、京丹後市でみつかりました。京丹後市弥栄町奈具岡（なぐおか）遺跡です。奈具岡遺跡は、日本海に注ぐ竹野川右岸の狭い谷間でみつかりました。北向きの急斜面に、たくさんの工房跡が建てられ、そこで、緑色凝灰岩や水晶を材料として、管玉や勾玉、小玉などいろいろな種類の玉が作られていました。当時、日本では数少ない鉄で玉作りの専用工具を作っていたこともわかりました。鉄は中国で作られた鉄器の一部を再加工したもので、朝鮮半島を経由してはるばる運ばれてきたと考えられています。玉と石製工具の材料も、地元でとれる水晶やメノウ以外の大半の石材が、北陸や瀬戸内沿岸など遠方から運ばれたものです。奈具岡の玉作り工人達は、広い範囲から貴重な材料を手に入れ、高度な技術を駆使して玉作りをしていたことが明らかになりました。

奈具岡遺跡で製作された玉類は、現在のところ地元では出土していません。貴重な製品ですから、交易品として遠くへ運ばれていったのかもしれません。

（田代　弘）

船着場

志高遺跡全景（左は由良川）

船着場と見られる遺構

私たちは、たくさんの荷物を運んだり、遠くへ出掛けるのに、船（海路）、自動車（陸路）、飛行機（空路）を利用することができます。自動車、飛行機が無かった昔は、その役割のほとんどを船に頼っていました。

船の歴史は古く、人々が海峡を渡って移動を始めた後期旧石器時代には、既に、利用されていたと考えられています。旧石器時代の船はみつかっていませんが、伊豆諸島神津島産の黒曜石を利用して作られた石器群が関東地方一円に分布することや、西日本に分布する剝片尖頭器が朝鮮半島の旧石器文化と共通することなどが船があったことを裏付けています。

縄文時代には船が盛んに利用されたことが確かめられています。縄文時代の船は、丸太をくりぬいて作った丸木舟です。日本全国で 80 例ほど出土しています。前回紹介した浦入の丸木舟もその一つです。

弥生時代になると、準構造船が作られ、船が大型化します。積み荷も多く積めるようになり、日本各地、朝鮮半島との往来が盛んになりました。弥生時代中期には、船荷の積み下ろしや、補修をしたりする船着場が造られます。魏志倭人伝に登場する一支（いき）国とみられる原の辻（はるのつじ）遺跡（長崎県壱岐）では弥生時代中期の石組みを持つりっぱな船着場がみつかっています。朝鮮半島との交易で行き来した船が繫留された船着場でしょう。

舞鶴市志高（しだか）遺跡でみつかった堤防状遺構も、こうした船着場の一つと考えられるものです。50 m前後の堤防状遺構の中央部に陸橋がついた T 字形の遺構で、川に面する部分を貼り石で護岸していました。日本海側屈指の大河川である由良川に面しており、由良川沿岸の水上交通拠点として作られた船着場と考えられています。

由良川の河口部は、丹後半島の東の付け根にあり、丹後と丹波を結ぶ大動脈です。弥生時代後期の丹後は、たくさんのガラス製品、鉄製品を保有する豊かな地域であることがわかっています。これらは、海上交通を利用した交易によりもたらされたものと考えられています。

大型の準構造船が、日本海沿岸各地を旅して得た豊かな物産を積んで、由良川を遡上する様子が想像されます。

（田代　弘）

丘の上のムラ

木津城山遺跡全景

木津城山遺跡の竪穴式住居跡

京都府と奈良県の境に近い、木津川市に所在するＪＲ木津駅の東側の丘陵の上には、弥生時代のムラがいくつもあります。最も高いところに位置するのが木津城山（きづしろやま）遺跡で、標高は 100 m を超え、現在の木津川の水面から 70 ～ 80 mも高いところにあります。右の写真にあるように、木津城山遺跡から北の方を眺めると、京都盆地を一望でき、天気がよければ愛宕山を望むことができます。木津城山遺跡が営まれたのは弥生時代後期前半ごろ、今から 2000 年ほど前です。

ところで、このような高い場所は、実は生活していくのに不便なところです。たとえば、飲料水の確保や水田耕作のために山の上と平地を行き来しなければなりません。しかし、丘陵の斜面にはしっかりとした竪穴式住居（斜面の下半分は流失しています）が営まれています。このような集落を、考古学では「高地性集落」とよんで、普通のムラとは少し区別しています。このような高い場所にムラを作ったのはなぜでしょうか。最も有力な説は、なんらかの争いごとが起こったために、このような高い場所に集落を営んだと言う説です。争いごとの具体的な内容は不明ですが、弥生時代から古墳時代に向かっていく時代の流れの中では避けて通れないものだったようです。

木津城山遺跡の周辺には、赤ケ平（あかがひら）遺跡や燈籠寺（とうろうじ）遺跡、内田山（うちだやま）遺跡など、やはり丘陵の上に営まれたムラがありますが、木津城山遺跡に比べると、低く、木津川水面からの高さは約 20 ～ 30 m ほどです。出土した土器を見くらべると、燈籠寺遺跡や内田山遺跡は木津城山遺跡よりも新しく、弥生時代後期中ごろに営まれたことがわかっています。木津川市ではありませんが、ほかの遺跡の調査例から弥生時代後期中頃から後半にかけては平地にムラが営まれており、後期を通じて徐々に山の上から平地へと、ムラの中心を移していったと考えられます。

なお、赤ケ平遺跡や燈籠寺遺跡では弥生時代前期や中期の遺構・遺物も見つかっています。また、燈籠寺遺跡では、縄文時代後期の縄文土器が出土しており、その頃から連綿と人々が生活していたことがわかっています。

（筒井崇史）

王の墓

赤坂今井墳墓（あかさかいまいふんぼ）は京丹後市峰山町に存在する弥生時代後期末頃（約1800年前）に造られたお墓です。このお墓は、現在の福田川河口から、峰山町の中心部に至る狭い谷を見下ろすように立地しており、当時、この道を通る人々の目を引く存在であったものと考えられます。

上空から見た赤坂今井墳丘墓

墳丘は、丘陵を削ったり、その際にでる土を利用して盛土を行って、南北39 m、東西36 m、高さ４ｍもの大きさをもつ四角形に整形されています。また、周囲には幅５～７ｍの平坦な面をつくっていました。この墳丘の上からは６基の、周辺の平坦部では未調査の部分もありますが16基以上の墓穴が見つかっています。王とそれを支えた人々の墓と思われます。

第４主体部の頭飾り

平成12年におこなった発掘調査により、墳頂部で見つかった舟のような木棺を安置した墓穴内（第４主体部）から、葬られていた人の頭部分で、鮮やかな朱とともに多数のガラスや緑色凝灰岩製の玉類が出土しました。この状態からこの玉類は頭飾りとして用いられたものと考えられます。また、被葬者の右腰あたりから鉄の剣や、鉄製の鉇が出土しています。豊富な副葬品を持つことで注目されましたが、この人物は２番目の地位の人とみられ、もっとも偉い人の棺内（第１主体部）は未調査です。

第４主体部（手前）と第１主体部（奥）

当時、鉄製品やガラスは原材料を中国大陸や朝鮮半島からの輸入に頼っており、最先端のハイテク素材といっていい非常に貴重な存在でした。丹後半島では、北部九州と並んで多量の鉄製品や玉類がみつかっており、活発な交易を行っていたものとみられます。当時は邪馬台国の卑弥呼擁立の直前に当たり、倭国内は戦乱期にあったものと記されています。そのなかで、流通をもとに、多量の鉄製品を蓄積していた丹後半島の重要性は非常に高かったものとみられます。赤坂今井墳墓の被葬者はこうした交易を支配した人物と推測されます。

（石崎善久）

遺跡でたどる京都の歴史３

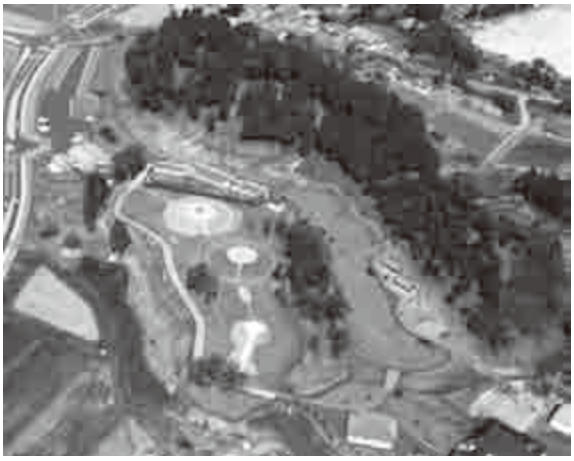
古墳時代の京都

古墳時代とは、「古墳」と呼ばれる高塚が、東北地方から沖縄を除く九州地方までの広い範囲で造営された時代です。弥生時代に水田経営をめぐって誕生したムラの代表が、より安定的な水田経営をめざし、集団を大きなものとしていきます。その結果、弥生時代の終わりころには、各地に有力な首長層が誕生することになり、やがて、彼らは、穀物に代表される富の蓄積や交易を通じて、大和を中心とした広域な政治的まとまり（ここでは「大和王権と」呼ぶことにする）を誕生させます。彼ら首長層が権力の証として大きなお墓を築くことを志向し、政治的なまとまりを示すものとして、前方後円墳を築いたのではないかと考えられています。また、前方後円墳は、盛大な首長霊（権）の継承儀礼を行うための舞台であったという考え方も有力です。国内が大和を中心にまとまったことは、前方後円墳が各地に築かれること以外にも、副葬される銅鏡や石製腕飾類が近畿地方を中心として全国に分布すること、そして炊飯具などの暮らしの道具が地域色を失っていくことからも推定できます。古墳の形には前方後円墳以外にも、前方後方墳、円墳、方墳などの墳形があり、その規模や形は、被葬者の政治的・経済的立場を表すものと考えられています。府内には大小１万基程度の古墳がありますが、その多くは、直径 10 m前後の円墳や方墳で、各地の有力農民層の墓だと推定されます。

古墳時代の始まりについては諸説ありますが、最も古い大型の前方後円墳である箸墓（はしはか）古墳（桜井市、全長 278 m）の築造をもって古墳時代の開始とする意見が有力です。この古墳は、３世紀中頃の築造であることが、出土遺物の年輪や炭素の半減期を利用した理化学的な測定法などの利用により明らかになりつつあります。古墳時代の終わりについては、前方後円墳が築かれなくなり、古代寺院の造営がはじまる６世紀後半頃とする考え方が優勢です。

京都府は、南北に長く、大和王権の発祥の地に近い山城地域、桂川上流域の南丹波地域、由良川流域にあたる北丹波地域、海を擁する丹後地域と地域ごとに様相が違っています。山城地域では、向日丘陵に３世紀後半から４世紀にかけて 100 m級の前方後方墳（向日市元稲荷（もといなり）古墳）や前方後円墳（向日市五塚原（いつかはら）古墳、同妙見山（みょうけんやま）古墳、同寺戸大塚（てらどおおつか）古墳）が次々と築かれます。同じ頃、南山城では、全長 180 mを測る大型の前方後円墳である木津川市椿井大塚山（つばいおおつかやま）古墳が築かれます。この古墳からは三角縁神獣鏡 33 面以上を含む計 37 面以上の銅鏡が出土しました。33 面の三角縁神獣鏡は、全国の首長墳から出土しているものと同じ型で作られたもの多いことから、大和王権が全国の首長と同盟関係を結ぶのに深くかかわった人物の墓ではないかと推定されています。なお、５世紀になると宇治市から城陽市にかけた台地上に久津川車塚（くつがわくるまづか）古墳（全長 180m）を中心とした久津川古墳群が築造されます。前期の古墳が少ないこの地に府内最大の古墳群が築かれるのは、この頃、大和王権の大王墓が大和から河内に移動することに連動するものと考えらます。古墳出現以前に全長 52 mの前方後円形を呈する黒田（くろだ）古墳を築く南丹波地域では、４世紀後半に

なって全長 84 mの園部垣内古墳が出現します。一方、隣接する兵庫県篠山市に全長 140 mの雲部車塚古墳が 5 世紀に築かれる頃には、亀岡盆地にはたくさんの方墳が築かれています。北丹波地域においては、 4 世紀に景初四年銘の盤龍鏡が出土した全長 40 mを測る福知山市広峯 15 号墳が築かれて以降、全長 30 m前後の前方後円墳が小水系ごとに築かれています。この地域も円墳や方墳が優勢な地域で、 5 世紀には綾部市私市円山古墳（直径 71 m）や同聖塚古墳（一辺 54 m）、福知山市妙見古墳（一辺 43 m）などがこの地域を代表する古墳です。弥生時代の終わり頃、巨大な赤坂今井墳墓を築いた丹後地域では、 4 世紀の中頃から 5 世紀前半にかけて、大きな前方後円墳が築かれています。最初に野田川流域に与謝野町白米山古墳（全長 90 m）、同蛭子山 1 号墳（全長 145 m）が築かれ、 5 世紀を前後する頃には、大きく海が入り込んでいた潟湖のほとりに、日本海側最大の前方後円墳網野町銚子山古墳（全長 198 m）、丹後町神明山古墳（全長 185m）が築かれます。その後、竹野川河口を遡った内陸部に黒部銚子山古墳（全長 100 m）が築かれますが、それ以降この地域には大型の前方後円墳は築かれません。


与謝野町古墳公園の前方後円墳、円墳、方墳

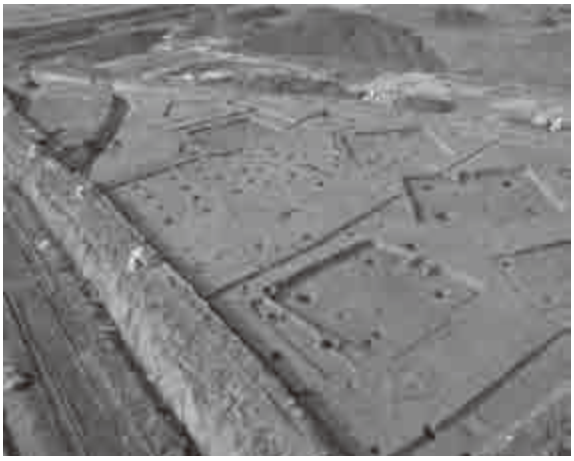
綾部市私市円山古墳

府内最後の前方後円墳は、 6 世紀後半に築かれた巨大な横穴式石室をもつ京都市右京区の蛇塚古墳（全長 75 m）です。 6 世紀には府内各地に横穴式石室や木棺を埋葬施設とする群集墳が築かれ、 6 世紀後半には、丹後半島中央部、綾部市、京田辺市では横穴墓群が築かれています。群集墳や横穴墓群は、飛鳥時代にまで引き続き造墓活動が続くものがあります。階段状の列石で化粧された綾部市山尾古墳や八角形の墳形をもつ亀岡市国分45号墳などは、律令国家に移行しつつある大和王権から認められた地域首長と考えられます。

八幡市女谷横穴墓群

古墳時代の人々の多くは、弥生時代に引き続き主に半地下式の竪穴式住居で暮らしています。住居は、平面形が方形で床面積は 20 ～ 30㎡のものが多く、 5 世紀頃には屋内炉に代わって竈が

一般化するようで、南丹市室橋遺跡などでは、多数の竈付き住居が見つかっています。竪穴式住居とともに、掘立柱建物が見つかることもあり、これらは、米などを蓄えた高床の倉庫の可能性も考えられます。多数の掘立柱建物とともに、朝鮮半島系土器、鍛冶滓、製塩土器などが出土した精華町森垣外遺跡では、平地式の大壁住居なども見つかっおり、渡来系技術者集団の集落内での居住が推定されます。しかし、このような集落は少数派で、府内で掘立柱建物が一般化するのは飛鳥時代以降になります。


亀岡市池尻遺跡の竪穴式住居跡群と掘立柱建物跡群

祭祀行為に係ると考えられる遺構も幾つか見つかっています。向日市中海道遺跡では、建物の周りを堀で囲んだ神殿風の建物が見つかっています。京丹後市浅後谷南遺跡では、古墳を飾った形象埴輪に表現されているような導水施設が見つかっており、水に係る祭祀行為に使われたものと考えられます。宮津湾の出口に近い宮津市難波野遺跡での多量の土器と玉類の出土状況や、舞鶴湾の出口にあたる舞鶴市千歳下遺跡での銅鏡片、玉類、鉄製品、土器などの集中的な出土状況は、海上交通の安全祈願などに係る祭祀行為の結果だと考えられます。

竈をもつ竪穴式住居跡 (南丹市室橋遺跡)

府内での水田遺構の検出は多くありませんが、古墳の築造に係る大規模な土木工事技術の存在から水田開発も飛躍的に進んだことが予想されます。亀岡市池尻遺跡や南丹市室橋遺跡で見つかった幅３ｍ、深さ２ｍを測る大型の溝などは、灌漑用水路の可能性が考えられます。

京丹後市浅後谷南遺跡の導水施設

大和王権が大陸から技術者を迎え、地方豪族の招聘の下、鉄生産、須恵器生産、埴輪生産などが府内各地で行われています。６世紀には、京丹後市遠處遺跡で砂鉄を原料とした鉄生産、園部町の大向窯跡群で須恵器生産、木津川市の平城山丘陵で埴輪生産などが行われています。

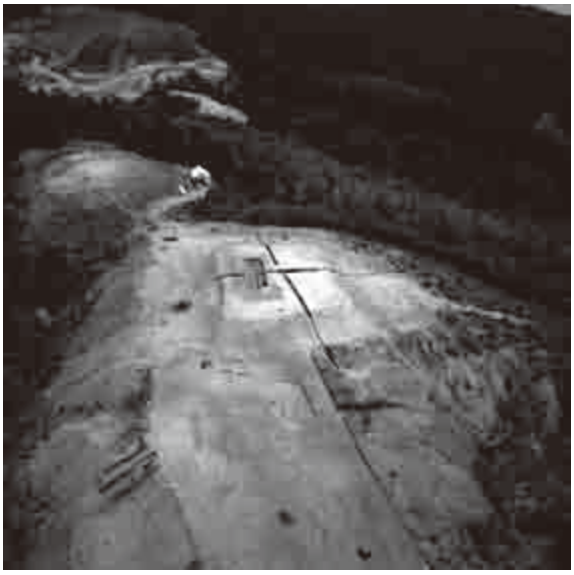
（肥後弘幸）

割られた銅鏡

京丹後市弥栄町堤にあった愛宕神社１号墳は一辺約 20 mの方墳で、長さ約６mの木棺に、死者とともに銅鏡、刀、斧、鎌、櫛や玉類などが納められていました。その中の銅鏡（獣形鏡）は破片を重ねて死者の足元の棺の壁に立て掛けた状態で出土しました。たいへん貴重な所持品である鏡は、死者の頭部周辺に完全な形で置かれるのが一般的です。割れ方や置く位置も不自然なことから、故意に割られて納められたことが想像できます。このような例は出土する鏡のほんの一部ですが、日本各地で点々と見られます。京都府でも南丹市の園部黒田古墳の双頭龍文鏡や、福知山市寺ノ段古墳の方格規矩鏡も割られた鏡の可能性が高いと考えられています。また、同じ時期に剣や鉇などの鉄器が折り曲げられて副葬される例も見られます。

このような状態で鏡や鉄器が出土する古い例は、九州の弥生時代後期にみられますが、全国的には弥生時代末から古墳時代のはじめに集中し、以後の例は大変少なくなります。また、一つの古墳群全体の中でも割ったり、曲げられたりするものは１、２点で、対象となる銅鏡の多くは、古くから伝えられた中国製のものです。このような行為は、各地域の有力者の死に際して行われた儀式のひとつと考えられます。弥生時代から古墳時代へと時代が変わる頃に限って、貴重で象徴的な所持品を、あえて破損して埋めるという儀式は、社会の変化、勢力再編と関係ある儀式だったのではないのでしょうか。なお、古墳時代前期を代表する三角縁神獣鏡は破砕の対象とはなっていません。

（長谷川達）



愛宕神社１号墳全景

愛宕神社１号墳の獣形鏡

園部黒田古墳の双頭龍文鏡（南丹市所蔵）

倭国女王の翡翠勾玉

奈具谷遺跡の丁字頭勾玉

平尾城山古墳出土の翡翠製丁字頭勾玉
「京都府史蹟勝地調査會報告」第３冊
より転載

いわゆる「魏志倭人伝」によると、魏・蜀・呉の三国を統一した晋に、倭国女王壱與（いよ）が大夫掖邪狗（えきやく）等を遣わし、男女生口30人を献じるとともに白珠（はくじゅ）５千孔、青大句珠（せいたいくしゅ）２枚などの貢物を届けたのは、正始８（247）年か９年のことでした。当時、倭国は古墳時代に入った頃でした。白珠は真珠、青大句珠は翡翠（ひすい）の大きな勾玉と考えられています。原文の「句」は「勾」のまちがいとされることが多いのですが、「句」は「勾」の本字であり「かぎ」を意味します。勾玉のあの不思議な形は、ともすれば体から飛び出てしまう魂（たま）をひっかけてそれを引き留める鉤（かぎ）なのです。逆に外部から侵入する邪霊を防ぐ鉤でもあります。考古学遺物でいえば、巴（ともえ）型銅器や平城宮跡出土の隼人（はやと）盾の模様も鉤です。

魂（正確には魄）の色は青白く、勾玉も縄文時代以来青い玉、つまり緑の翡翠で作られました。ところが、既に弥生時代から翡翠は貴重品で、弥生時代にはガラス、古墳時代中期以降は碧玉や赤瑪瑙などの代用品が多くなります。勾玉の歴史は、本質の忘却にともなう代用品の変遷ともいえます。京丹後市奈具岡遺跡の水晶製勾玉は、ここの水晶製小玉工房に持ち込まれたリサイクル品でしょうが、弥生時代中期、すでに勾玉本来の意味が忘れかけられていたのかも知れません。

倭国女王が魏の皇帝に貢いだ青大句珠は、頭部に数条の刻線がある翡翠の大型丁字頭（ちょうじがしら）勾玉と考えられます。この形は、弥生時代中期後半頃の北部九州で出現しました。甕棺の王墓などに副葬されています。同時代に遠く離れた京丹後市奈具谷遺跡から大型の丁字頭勾玉が出土しているのは注目されます。大型というのを全長４センチ以上としますと、弥生時代の後期・終末期には筑後・出雲・讃岐などで散見される程度です。前方後円墳の時代になると、副葬品の重要なアイテムの一つとして相当増えたと思われるのですが、発掘調査で出土した例は意外に少ないのです。

古墳時代でも大型品は少ないとすれば、女王の勾玉も白珠の５千に対してわずかに２個というのは、それがかなり貴重な品物であったことを裏付けてはいないでしょうか。

（小山雅人）

勾玉の形と色の意味については、金関丈夫『考古と古代』（法政大学出版局、1982）に拠っています。

首長の墓－瓦谷（かわらだに）１号墳－

古墳時代に入ると、民衆の墓とは隔絶した巨大な墓（古墳）が、首長の墓として全国一斉に造られるようになります。そして、墳丘や埋葬施設の形や構造（段築・埴輪・葺石など）は、古墳社会を主導したヤマト王権との関わりの深さによって様々な姿を採るようになります。

京都府では、椿井大塚山古墳や元稲荷古墳（本号36ページ参照）が３世紀の中で営まれますが、古墳時代でも前期後半（４世紀後半）になると、より広い地域に古墳が営まれるようになり、京都盆地南部においても数本の中小河川で区分される小地域ごとに、中規模な前方後円墳や前方後方墳が営まれるようになります。

瓦谷１号墳は、現在の木津川市の地域を生産基盤とした集団の長が、古墳社会を主導する王権に自らの支配権を承認してもらう証に造られた墓です。昭和61年から６年間にわたり発掘調査が実施され、その全貌が明らかとなりました。段築と葺石をもたない全長51ｍの前方後円墳で、後円部の中心に長大な埋葬施設がありました。棺は、刳り抜き式の木棺を多量の粘土でくるんだ粘土槨と、粘土による密封がみられない長大な箱形木棺が、主軸を南北方向に揃えて並んでいます。棺の長さはともに７ｍを超え、内部を仕切板で３つの空間に分け、中央の空間に人を葬っていました。

瓦谷１号墳の埋葬施設

鏡の出土状況

盛矢具の出土状況

棺の内外から、銅鏡・武具・武器・竪櫛（たてぐし）・ガラス玉などの多様な副葬品が出土しました。なかでも、列島内ではまだ定式化していない鉄製の甲冑や、40本を一束にして容器（靫（ゆぎ））に納められた状態の鏃（やじり）（多量の鉄鏃に数点の銅鏃または碧玉製鏃形石製品が組み合う）などは注目されます。豊富な副葬品や埴輪類から、この古墳は４世紀の後半期に築造された首長墓であることが明らかとなり、山城地域の古墳時代を研究していく上で重要な発見となりました。　（伊賀高弘）

辟邪（へきじゃ）の埴輪

古墳のなかには、墳丘に様々な埴輪を樹立したものがみられます。埴輪には、様々な意味合いがあるものと考えられます。

今回、紹介する盾持ち人形埴輪は、亀岡市時塚 1 号墳から出土した特殊な埴輪です。

古墳は一辺約 25 mの方墳で、造り出しと呼ばれる前方部を矮小化したような施設をもっています。この古墳の本来の主である人物の埋葬施設は削平され、失われていましたが、造り出しで 1 基の墓穴を発見しました。家臣的な人物の墓と見られますが、鉄製の武器や馬具が納められており、武人的な人物とみられます。

埴輪は周溝内から、出土しました。出土遺物からこの古墳は 5 世紀の後半に造られたものとみられます。

この盾持ち人形埴輪は、盾形埴輪の上段が人面にかたどられた特殊なもので、頭部には耳や、角状の装飾がなされています。また、目の周りには刺青（いれずみ）もしくは隈取りとみられる装飾が施され、全体としておどろおどろしい表情をしています。鼻は失われていますが、これは埴輪を焼いている窯の中ではじけて失われた可能性が高いものと見られます。また、唇や眉の部分も立体的に作られています。

この埴輪はもともと、邪悪なものをはね返すための防具である「盾」と、邪悪なものをにらむおどろおどろしい「顔」が一体化したものとみられており、古墳の主を脅かす邪悪なものを退けるためにつくられたものと思われます。

この埴輪は、長い間、古墳の主を守るために古墳に立ち続けていたものとみられます。

（石崎善久）

上空から見た時塚 1 号墳

時塚 1 号墳出土の盾持ち人形埴輪

刺青か隈取りを施した顔

蛇行剣（だこうけん）の出土とその意義

剣身が蛇行する剣を蛇行剣と呼んでいます。現在、京都府内では、綾部市奥大石（おくおおいし）２号墳ＳＸ 204 と南丹市八木町城谷口（じょうだにぐち）２号墳から出土しています。奥大石２号墳が造られた古墳時代中期（5 世紀）の蛇行剣は、各地域の首長墓からはほとんど出土しておらず、関東から九州北部の各地の中心地から離れた小古墳を中心に約 30 点確認されています。また、緩やかに２カ所で蛇行し、全長が 70cm 前後の蛇行剣が多いことから、一元的に生産、分配された可能性があります。一方、城谷口２号墳が造られた古墳時代後期（６世紀）の蛇行剣は、九州南部を中心とする古墳や地下式横穴墓から約 30 点出土しており、長さ、蛇行回数、形状が一定しないことから一元的な生産ではなかったと考えられます。以上の状況から時代毎に分布域が変化するとともに、各地域の首長墓からほとんど出土しないことから、甲冑などに比べると、下位に位置付けるべき権威象徴の道具立てであったと考えられます。

奥大石２号墳の木棺直葬墓
（蛇行剣は木棺の横から出土）

蛇行剣二態
左：奥大石２号墳出土（古墳時代中期、全長 70cm）
右：城谷口２号墳出土（古墳時代後期、全長 82cm）

次に、古墳時代中期に突然出現する蛇行剣の系譜について信仰の対象であった「蛇龍」を中心に私見を述べます。古代中国の蛇龍には自然を司る概念が認められます。その蛇龍をも自由に操れる中国の農耕神「雨師妾（ウシショウ）」などの能力が中国皇帝には不可欠であったと思われます。大陸交渉が盛んになる古墳時代中期にその概念が大陸から伝わり、蛇に見立てた蛇行剣が生成されたと考えています。畿内政権下での各地域の首長は、農耕司祭者から武人へと急速に変化しますが、小地域の首長は、依然として司祭者的な性格が強かったために、風変わりで呪術的な蛇行剣を必要としたのではないでしょうか。

城谷口２号墳の横穴式石室
（蛇行剣は石室奥壁近くから出土）

（小池　寛）

方形壇をもつ山尾（やまお）古墳

尾根上に立地する山尾古墳

山尾古墳の墳丘全景

山尾古墳の主墳丘

山尾古墳は、由良川中流域に形成された平野部から約 5 km 北方の綾部市の山間部に位置する古墳です。墳丘の形態は、方墳の前庭部に上下二段の方形壇が付設するもので、終末期の古墳に特徴的な墳丘形態です。主墳丘となる２段築成の方墳の規模は、東西約 9.0 mを測り、前庭部の方形壇の下段幅は推定約 21.4 mを測ります。石室は自然石の乱石積みによる無袖式横穴式石室です。床面はすでに盗掘されていましたが、若干の須恵器が出土しました。

方形壇を付設する終末期の古墳は、西日本の各地で約 10 例を数えます。最も発達した方形壇をもつ墳墓は、舒明天皇陵に比定され、実際にその可能性が高いとされる奈良県桜井市忍坂に所在する段ノ塚古墳です。段ノ塚古墳は、八角墳の前面に左右幅約 105 mにわたる３段積みの方形壇をもつ７世紀中葉の大規模な墳墓です。段ノ塚古墳のほかにも、斉明陵説が有力な岩屋山古墳や、孝徳陵説がある叡福寺北古墳も方形壇の存在する可能性が指摘されています。方形壇を備えた八角墳は、中央集権国家体制の祖となった舒明天皇の皇統に属する皇族の墳形として認識されていた可能性があるのです。

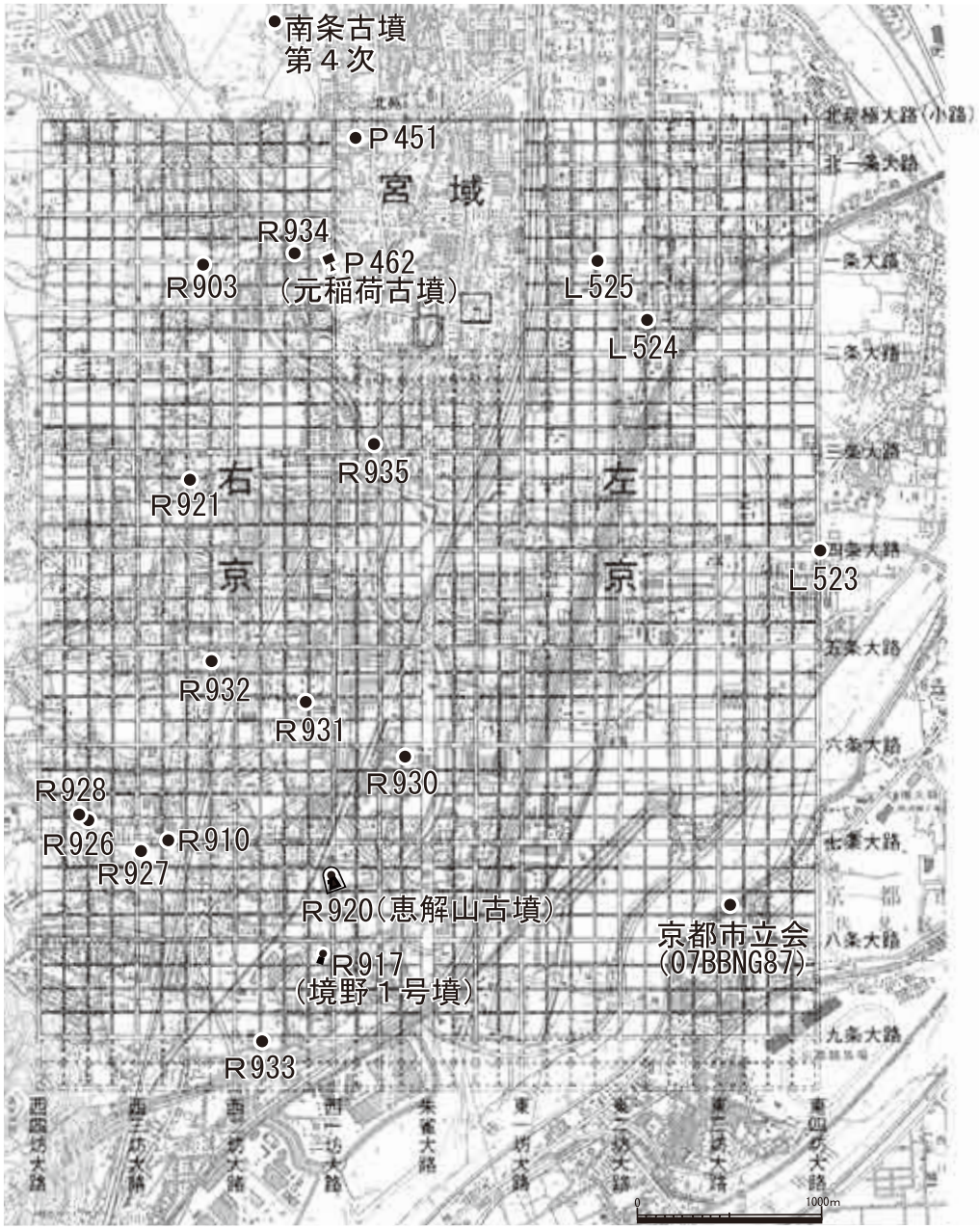
方形壇は、八角墳を採用する天皇陵において定形化したのち、方墳を主墳丘とする一部の墳墓にも採用されました。方墳に方形壇が付随するものとしては、大阪府太子町田須谷１号墳や、岡山県真庭市北房町大谷１号墳などがあります。山尾古墳は、主墳丘と方形壇が明瞭に区分されるもので、より古い形態を示しており、石室形態や出土土器などから、おおよそ７世紀第３四半期頃の築造と推定され、八角墳から方墳に方形壇が取り入れられた最初期のものと考えられます。山尾古墳の被葬者は、段ノ塚古墳に類似する墳丘形態に加えて、後代の文献『三大実録』には周辺の何鹿郡の郡領に舒明天皇の皇統と関連の深い刑部氏の名がみえることなどから、舒明天皇の皇統に近侍した人物だったのではないでしょうか。

（高野陽子）

長岡京調査だより・102

毎月１回、長岡京域で調査に携わっている機関が集まって長岡京連絡協議会を実施している。平成 20 年１月から３月までの例会では、21 件について報告があった。以下では、報告地点を地図上に示し、顕著な成果が得られたものについてその概要を紹介する。

宮域　宮第 462 次では、京都盆地で最も古く位置づけられる前方後方墳の元稲荷古墳の墳丘の調査が実施された。後方部の東側の調査により、墳丘裾において葺石とその外側に帯状に礫敷



調査地位置図（1/40,000）

（向日市文化財事務所・（財）向日市文化財センター作成の長岡京条坊図に加筆）

調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

が存在することが判明した。墳丘の構築と一連の工程で施された礫敷は、くびれ部で堅固な構造を示し、壷形埴輪が出土するなど、後の造り出し部の原初的な祭祀施設を連想させる調査成果が得られた。また、後方部側面にみられる、やや大きな石材を用いる葺石基底石は、古墳主軸に対してやや斜交する直線を描き、後方部が後方端に向かって広がる台形を呈する可能性が深まった。

既往の調査区の座標確認もあわせて実施し、全長 91.2 m・後方部長 49.4 mの墳丘規模が定まった。

右京域　京都盆地の桂川右岸域で最大規模の前方後円墳である恵解山古墳では、史跡整備に伴う確認調査が実施された（右京第 920 次）。その結果、墳丘各部の構造および周濠外縁の状況を知る上で資料が得られた。前方部の墳丘は少なくとも３段の段築をもち、各段斜面に葺石、段築平坦面に埴輪列が備わっていることが判明した。後円部墳丘は、基底部を基盤層（段丘礫層）の掘り込みで土壇状に削り出し、その上に盛土を施すことで築造している。西側の周濠は非常に浅く、緩やかな勾配を示す外縁の斜面には、拳大の礫が散乱しているか所も認められた。中段墳丘の埴輪列と葺石が確認された前方部東側の調査では、堆積層中から剣や鎌・斧・鏃などの鉄製品がまとまって出土し、前方部墳頂で確認されていた鉄器埋納土坑が複数存在する可能性が高まった。西側くびれ部でその存在が確認された造り出し施設は、東側対称の位置に存在しないことがわかった。後円部に近い調査区において、結晶片岩の砕片が出土し、竪穴式石槨の石材が周囲に散乱している状況が明らかとなった。樹立されていた埴輪や鉄器類の特徴から、古墳時代中期でも古い段階に古墳の築造時期を求めることができる。

京都第二外環状道路建設に伴う調査（右京第 926・927・928 次）では、長岡京条坊の施工を裏付ける積極的な情報は得られなかった反面、縄文時代後期と弥生時代中期後葉・古墳時代後期の集落の存在を窺わせる遺構・遺物が発見された。また、右京第 927 次では、奈良時代の瓦類が多量に入った２条の平行する東西溝が検出され、古代寺院（鞆岡廃寺？）が近在する可能性が高まった。

京域外　（財）向日市埋蔵文化財センターにより南条遺跡第 4 次調査が実施され、直径約 25 mの中規模な円墳である南条３号墳の墳丘構造の一端が明らかとなった。墳丘は２段に築かれ、上段墳丘の斜面では葺石が検出されるとともに、異質土の交互水平施行により盛土されている様子が明らかとなった。中段テラス面は削平を受けて、埴輪列などの外部施設は残されていなかったが、５世紀前半の特徴をもつ埴輪片が採取されている。

大山崎町教育委員会によって、４世紀後半築造の前方後円墳である境野１号墳の後円部西縁の調査が実施され、下段墳丘の基底部において、葺石と埴輪列を確認した。埴輪列は先に検出していたくびれ部付近のそれより、1.2 m低い位置で確認され、後円部墳丘が３段築成の可能性が高まった。

（伊賀高弘）

普及啓発事業

当センターの主な事業は、大きく分けて二つです。一つは遺跡の発掘調査とその記録、もう一つは、調査で明らかになった事柄を広く府民の皆様にお知らせし、埋蔵文化財の保護について考えていただく普及啓発業務です。

普及啓発業務には、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会などの開催、埋蔵文化財情報誌の刊行などがあります。

埋蔵文化財セミナー

年に３回、府内各所で開催しています。平成 19 年度最後のセミナーは、第 109 回埋蔵文化財セミナーです。「都城と瓦－古代宮都の調査と瓦－」を主題として、平成 20 年２月 24 日（日）に、京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）第８研修室で開催しました。

京都府は恭仁宮・長岡京・平安京の都が置かれるなど、長く国政の中心として極めて重要な地域でした。このため、発掘調査により、歴史の記述を直接裏付けるような重要な発見が絶えることがありません。

今回のセミナーでは、大極殿回廊など宮の中心部分の構造がわかってきた木津川市の恭仁宮跡、大型建物の存在が明らかとなった長岡京南西部の近年の調査、国家の儀式や饗宴が行われた京都市の平安宮豊楽院の三題について、最新の調査や研究の成果を、各調査機関の担当者を講師に迎え、映像をまじえた講演会を実施しました。

当日は、京都市にしては珍しく積雪で交通機関が乱れましたが、91 名の参加を得て盛況のうちに無事終了することができました。

なお、平成 20 年度は６月と８月、平成 21 年２月の３回のセミナー開催を計画しており、第 110 回埋蔵文化財セミナーを亀岡市民ホールで、８月９日に第 111 回埋蔵文化財セミナーを向日市民会館で実施します。

また、７月 19 日から８月 24 日まで、向日市文化資料館を会場に第 24 回小さな展覧会および絵でみる考古学展（早川和子原画展）を開催します。ふるってご参加ください。　（伊賀高弘）

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

（平成 20 年 6 月 1 日現在）

理 事 長

上田正昭
（京都大学名誉教授）

副理事長

中尾芳治
（恭仁宮跡調査専門委員会委員長）

常務理事

中西和之

理　事

石野博信
（兵庫県立考古博物館長・徳島文理大学教授）

井上満郎
（京都産業大学文化学部教授・同学日本文化研究所長）

都出比呂志
（大阪大学名誉教授）

中谷雅治
（元京都府教育庁指導部理事文化財保護課長事務取扱）

高橋誠一
（関西大学文学部教授）

増田富士雄
（同志社大学理工学部環境システム学科教授）

上原真人
（京都大学大学院文学研究科教授）

山内　一
（京都府文化環境部文化芸術室長）

高熊秀臣
（京都府教育庁指導部長）

小池　久
（京都府教育庁指導部理事文化財保護課長事務取扱）

監　事

大槻　茂
（京都府企画理事・危機管理監兼会計管理者）

森永重治
（京都府教育庁管理部長）

事務局長		中西和之
事務局次長		安田正人
総　務　課	課　　長	安田正人（兼）
	総務係長	杉江昌乃
	主　　任	今村正寿
	専門調査員	橋本清一 （府立山城郷土資料館へ派遣）
	主　　事	鍋田幸世
	主　　事	宮下真也
調査第１課	課　　長	肥後弘幸
	主　　幹	水谷壽克
	企画係長	水谷壽克（事務取扱）
	主査調査員	伊賀高弘
	資料係長	田代　弘
	主任調査員	田中　彰
調査第２課	課　　長	肥後弘幸（兼）
	総括調査員	小山雅人
	課長補佐	石井清司
	調査第１係長	小池　寛
	主任調査員	松井忠春
	主任調査員	引原茂治
	主任調査員	竹原一彦
	主任調査員	増田孝彦
	主査調査員	柴　暁彦
	調　査　員	石崎善久
	調査第２係長	森　　正
	次席総括調査員	辻本和美
	主任調査員	戸原和人
	主任調査員	中川和哉
	専門調査員	竹井治雄
	専門調査員	黒坪一樹
	専門調査員	岡﨑研一
	調　査　員	高野陽子
	調査第３係長	石井清司（兼）
	次席総括調査員	伊野近富
	主任調査員	岩松　保
	主任調査員	森島康雄
	専門調査員	石尾政信
	調　査　員	筒井崇史
	調　査　員	村田和弘
	調　査　員	松尾史子

センターの動向

（平成20年2月～平成20年5月）

1．できごと

2　1　増田富士雄理事木津川河床遺跡（八幡市）現地視察

7　人権問題特別研修（於：京都市）戸原和人主任調査員参加

8　蔵垣内遺跡（亀岡市）関係者説明会（参加者40名）

俵野廃寺発掘調査終了（10.17～）

13　人権問題特別研修（於：京都市）黒坪一樹専門調査員参加

14　戸田遺跡（福知山市）発掘調査終了（11.28～）

上田正昭理事長文廻池（馬場南）遺跡（木津川市）出土品調査指導

15　人権問題特別研修（於：京都市）鍋田幸世主事参加

16　室橋遺跡（南丹市）現地説明会（参加者45名）

18　井上満郎理事文廻池（馬場南）遺跡現地視察

都出比呂志理事長岡京跡・伊賀寺遺跡（長岡京市）現地視察

19　高橋誠一、中谷雅治理事室橋遺跡・蔵垣内遺跡現地視察

22　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（於:京都市）中西和之事務局長、安田正人次長、肥後弘幸調査第2課長、杉江昌乃総務係長、今村正寿主任出席

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックＯＡ委員会（於：大阪市）小山雅人総括調査員出席

鹿背山瓦窯跡（木津川市）発掘調査終了（４.24～）

23　高槻市立しろあと歴史館連続講座（於：高槻市）森島康雄主任調査員講師派遣

24　第109回埋蔵文化財セミナー開催（於：京都市　参加者91名）

26　文廻池（馬場南）遺跡発掘調査終了（10．９～）

27　長岡京連絡協議会（於：当センター）

28　戸田遺跡（11.28～）、室橋遺跡（９．５～）、長岡京跡･伊賀寺遺跡ほか（４.24～、11.19～）、木津川河床遺跡（10.30～）発掘調査終了

29　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議（於：大阪市）小山雅人総括調査員出席

3　2　乙訓文化財事務連絡協議会「スライドでみるおとくにの発掘」（於：大山崎町）森　正調査第2係長講師派遣

7　蔵垣内遺跡（10.15～）発掘調査終了

19　長岡京連絡協議会（於：当センター）

人権研修推進委員会（於：当センター　参加者９名）

21　妙心寺派如城寺彼岸講演（於：南丹市）高野陽子調査員講師派遣

舞鶴市立郷土資料館「中山城跡調査成果」展示開始

22　第 23 回宇治市発掘調査報告会（於：宇治市）森島康雄主任調査員講師派遣

明治大学学術フロンティア推進事業シンポジウム「日本海沿岸の古墳出現前夜」（於：東京都）肥後弘幸調査第２課長講師派遣

26　第 82 回役員会・理事会（於：ルビノ京都堀川）上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、中西和之常務理事・事務局長、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、高橋誠一、増田富士雄、上原真人、山内　一（代理出席）、宮野文穂、小池　久各理事出席

31　退職職員辞令交付

4　1　異動職員辞令交付

4　職員人権研修「ビデオ視聴」・「一年を振り返って」

18　職員研修「近年の埋蔵文化財保護をめぐる現状」講師；肥後弘幸調査１・２課長

21　文廻池（馬場南）遺跡（木津川市）発掘調査開始

23　戸田遺跡（福知山市）発掘調査開始

長岡京連絡協議会（於：当センター）

24　長岡京跡・友岡遺跡（長岡京市）発掘調査開始

30　俵野廃寺（京丹後市）発掘調査開始

5　7　長岡京跡・伊賀寺遺跡（長岡京市）発掘調査開始

9　新庄遺跡（南丹市）発掘調査開始

16　職員研修「埋蔵文化財写真の現状など」講師；田中彰主任調査員

23　上原真人理事俵野廃寺現地視察

南丹市新庄小学校出前講座　講師；高野陽子調査員

24・25　日本考古学協会第 75 回総会（於：神奈川県）伊野近富次席総括出席

28　長岡京連絡協議会（於：当センター）

中西和之常務理事・事務局長丹後・中丹地域現地視察

人事異動

３．31　宮野文穂理事退任

長谷川 達調査第 1 課課長退職（府派遣解除）

４．１　高熊秀臣（京都府教育庁指導部長）理事就任

編集後記

情報 106 号をお届けします。

本号では、昨年度の成果として、丹後地域の茶臼ヶ岳古墳群、山城地域の木津地区所在遺跡の２本の詳報を掲載しました。

また、「遺跡でたどる京都の歴史」は、先号掲載予定でありました弥生時代と、古墳時代の２本を一挙に掲載しています。

また、編集環境が変わりましたので、先号までと比べて、文字の感じなど、やや異なるところがあるかと思いますが、試行錯誤しながら編集を行っていきたく思いますので、今後ともよろしくお願いします。

（編集担当　石崎善久）

京都府埋蔵文化財情報　第106号

平成 20 年 8 月 15 日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002　向日市寺戸町南垣内 40 番の３

Tel　(075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189

http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星印刷商事株式会社

〒 604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel　(075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

紫のゆかり、ふたたび

源氏物語千年紀